仮面ライダー&プリキュア　戦う戦士たち

ライダーGX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー&プリキュア　戦う戦士たち

【Ｎコード】
Ｎ０１１６Ｘ

【作者名】
ライダーＧＸ

【あらすじ】
仮面ライダーとプリキュア・・・、それは密かに人々の平和を守り続けている戦士である。仮面ライダーとプリキュアは人々の平和と世界を守る為日々戦い続けている

注意！：タイトルを変更しました・・・。勝手なことですいませんｍ（＿＿）ｍ

プロローグ（前書き）

自分こと作者はかなりの素人です。大変解らないこともあると思いますので、ご理解ください。

プロローグ

仮面ライダー・・・、それは密かに人々の平和を守り続けている戦士である。仮面ライダーは人々の平和と世界を守る為日々戦い続けている

そして仮面ライダーの他に世界を守る戦士達がいた・・・、その戦士はプリキュア・・・。

プリキュアは妖精たちの力で変身して戦う戦士である。

仮面ライダーとプリキュアは、世界征服を企む悪の秘密結社オルゲータの陰謀を阻止するべく立ち向かう。

これは戦士達の熱き戦いと友情の物語なのである。

登場紹介（前書き）

まずは登場人物です

注意！：少し加えます。御免なさい。

登場紹介

佐藤　健一　（さとう　けんいち）

身長：１８１ｃｍ

体重：７８？

年齢：１８歳

体格：大きく引き締まった身体

この物語の主人公、高校３年生の少年で武術とバイクの達人である。
武術とバイク以外に銃の名手でもある。
勉強は得意方で他の人に勉強を教えている。
朝はちょっと弱く、たまに寝坊するときもある。
ある日から仮面ライダーの力を手にする
変身ライダーはカブト

伊藤　綾香　（いとう　あやか）

身長：１６５ｃｍ

体重：４８？

年齢：１８歳

体格：スレンダーでスリム

この物語のヒロイン、健一とは幼馴染でありなんでも知っている女の子
学歴トップでいつも1位を取っている天才であり、料理の腕も凄腕である
朝は早い方で、毎日健一を起こしに行っている。
アーチェリーの天才であり弓道の助っ人もしている
第十一話の様に美保と一緒にダンスをする為、結構上手い
彼女も同じように、ある日から仮面ライダーの力を手にする
変身ライダーはファム

滝島　一真　（たきしま　かずま）

身長：１８０ｃｍ

体重：７６？

年齢：１８歳

体格：アスリート的な身体

健一の中学の時からの悪友。
いつもバカな事と女の子にしか頭になくて困っている。
でも戦闘の時はかなり真面目。
テコンドーの達人でもあるがいつも健一には負ける。
槍の腕もかなりの物でもある
勉強は苦手でテスト前はいつも徹夜している
彼も同様、ある日から仮面ライダーの力を手にする

変身ライダーはカイザ

真柴　龍　（ましば　りゅう）

身長：１８３ｃｍ

体重：８０？

年齢：１８歳

体格：ボディビル的な身体

健一の中学の時からの友人
冷静な判断力と発想でいつもみんなをまとめている
勉強も得意、料理も得意である。
ムエタイの達人でもある
薙刀の腕はプロ級でかなりの物。
彼も同様、ある日から仮面ライダーの力を手にする
変身ライダーはイクサ

大塚　誠二　（おおつか　せいじ）

身長：１７８ｃｍ

体重：７０？

年齢：１８歳

体格：意外と普通

健一の中学の時からの友人
いつも優しく誰からも頼りにされている。
メカニックの天才でいろんなガジェットツールを開発している。
下手したら戦隊ロボも作っていまう優れもの。
中国拳法の使い手で凄腕である
斧を使う戦士でもある
彼も同様、ある日から仮面ライダーの力を手にする
変身ライダーはバース

羽山　美保　（はやま　みほ）

身長：１６２ｃｍ

体重：４０？

年齢：１８歳

体格：スリム

第十一話で登場したオリキャラ
綾香の友達で中の良い人物で少し気楽な少女。

コンピュータの天才でいろんなパソコンを持っている。
ダンスが大好きでブレイクダンスやヒップホップダンスも得意とする。
勉強は割りと普通な方である。
この中で唯一まだ仮面ライダーに覚醒していない。

登場紹介（後書き）

まぁこのな感じです

解らない所もありますがどうか見てください

次回は健一達の物語の始まりです

第一話　始まりの日（前書き）

いよいよ始まります。

どうか見てください

第一話　始まりの日

俺は名前は佐藤（さとう）　健一（けんいち）、流星学園に通う高校三年だ。

この流星学園はかなり変わっている。

一つは服装は私服でもＯＫ

二つはバイク通でもＯＫ

三つはここの学園長がかなりの変人だとゆうこと

まぁ最後の方はほっといて、俺は今自分で何をしているかと言うと・・・

「っしゅ！」

バシッ！！！

「うわぁ！！！」

ドテェ！！！

「いててぇ・・・」

「あ、悪い・・・大丈夫か？」

「はぃ、だ、大丈夫です・・・」

相手は顔をやすりながら言う

そう、俺は今、ボクシング部の練習に来ている、っと言っても正式部員ではなく、ただの助っ人なのだ

「すごいな・・・、これで五人抜きでぞ？」

ボクシング部の顧問が言う

「はい、しかも右だけで・・・」

部員は俺のパンチ力に関心する

そんなにすごくはない自分でも拳の強さなんて気にもしてない

ただ、［あの］力を手にしてしまった時から・・・

「それじゃー失礼しました」

俺はボクシング部を出る、助っ人の時間が終わったからである

「おぅ！また頼むぞ！」

顧問はそう言ってさる

また助っ人をやれってのか・・・（汗）

「はぁ・・・「随分と活躍してるわね？」っあ、綾香・・・」

俺に声を賭けて来てのは俺の幼馴染　伊藤（いとう）　綾香（あやか）である

長い髪に綺麗な瞳・・・、他の人は勿体無い人である

「今日も助っ人を頼まれたの？」

綾香は俺に尋ねてきた

「あぁ、まーな」

俺はそう言って歩き始めた

「ねぇ、大丈夫なの？力加減と出来ないんでしょ？」

うっ！　い、痛い所を・・・

「あぁ　なかなかパワーをコントロールすることが出来なくてな」

これでもかなり手加減したんだけどな・・・

「まぁ、しょうがないけどね～、私たちは［あの］力を手にして以来は」

「・・・」

まぁ考えてもしょうがないだけどな・・・

バイク置き場に来た俺達は自分のバイクを取りにきた

「さてと、帰るか」

俺は自分のバイクにキーをさしエンジンをかけた

ブォーン！！！

俺のバイクは元気よく掛かった

でも俺のバイクは少し違う

フロント部は赤い角が出ており、ボディは赤と銀で塗装されている
まるでカブトムシをモチーフしたように・・・
俺はバイクに跨り、綾香も俺に続いて後ろに跨る
そして、ヘルメットを被る
「しっかり捕まってろよ？」
「うん」
ブォーン！！
俺はアクセルを回してバイクを走らせる

しばらくすると俺たちは広い公園の横に止まった
「どうしたの？」
綾香は不思議そうに尋ねる
「覚えてるか？この公園」

「え?、っあここは」

綾香は懐かしそうに公園を見る

「ここは、たしか・・・」

「そう、俺達の思い出の場所・・・」

ここは俺と綾香の思い出のある公園である

「そっかぁ・・・あれから１０年も経つのね・・・」

「あぁ、懐かしいな～」

俺達は懐かしそうにいしていると

ドカーーーン!!!!!

「「!!!」」

な、なんだあ!!!

公園内で爆発が起きた

「なに!!」

「いくぞ!!!」

「え！！！」

俺達はバイクを降りて爆発した所へ向かった

俺は爆発の起きた所へ来ると

「はぁ！！！」

「おりゃ！！！」

謎のコスプレを着た少女たちが謎の怪人に蹴りをお見舞いしていた所だった

「これは一体？」

俺は思わず少女たちに目を向けてしまう

一人はピンクの服

もう一人はブルーの服

「健一！！！あれ！！！」

綾香が指を指した方向を見ると

「あれは！！！」

大きい体、気持ち悪いフォルム

そして馬のモチーフをした怪人・・・、間違いない！

「オルゲータ・・・！！！」

こんな所で会えるとは・・・って考えてると

「そこのお二方！！ここは危険です！！早くに逃げてください！！！」

おぉ、俺達に気づいたか・・・

「健一！行ける！？」

「あぁ！、今回は俺一人でも大丈夫だ！」

そう言って俺は怪人に向かって歩いてく

「なっ何やってるんですか！！」

「逃げなさいってば！！！」

「大丈夫だ！黙って見てろ！」

俺はそう言って怪人に向きあう

「オルゲータ！！！　お前たちは・・・俺が倒す！！！」

俺はいつの間にか腰に巻かれていたベルトを現すと

キィーン！

空から赤いカブトムシこと〔カブトゼクター〕が、俺の周りに飛び回る

俺はそいつを掴みある言葉を言う

おなじみあの言葉だ

「変身！！！」

掛け声と同時にゼクターをベルトにセットする

『ＨＥＮＳＨＩＮ』

電子音と共にベルトから全体まで俺の体は鎧に包まれる

そしてここに、仮面ライダーカブトが誕生した。

第一話　始まりの日（後書き）

書けました・・・

長いです・・・・（ｗｗｗｗ）

っとまぁ怪人やプリキュアたちはこれから書いていくつもりです

次回もお楽しみに

第二話　戦いと出会い（前書き）

お待たせしました！

ではごゆっくり見ていってください。

少し加えました。

第二話　戦いと出会い

少女ＳＩＤＥ

「な、何ですか！？あれは？！」

私たちが戦っている所に男の人がやって来て私たちが逃げてと言っていた所で、赤いカブトムシがやって来て、男の人の腹部に巻かれていた機械のベルトにくっ付いたら、ベルトから鎧の様な物があの人の身体を包み込む様になっていった。

「ね～、何あれ？（汗）」

「わ、私に言われても～（汗）」

「カブトよ」

「え？」

私たちの隣にやって来たのは、さっきの男性と居た人でした。

「あれをご存知なんですか？」

「うんもちろん、でもその話は後でね？」

「は、はい・・・」

私たちはこの人と一緒にあの人と怪物の戦いを見ていたのです。

―ナレーション―

仮面ライダーカブトマスクドフォームに変身した健一はオルゲータ怪人（ホースオルグ）に向かって構える。

「さぁ！　こい！」

健一の言葉に引かれる様に、ホースオルグは走っていく。

「ウガァ！」

「なんの！」

大きい振りかぶる様な攻撃を難なく避ける。

「せい！」

ドカァドカァ！

「ガアァ！」

健一の素早いパンチにホースオルグはひるむ。

「ウガァ！！」

ホースオルグはすぐに立て直し反撃を加えるが、そっこうにかわされ、健一の打撃をもらってしまいその打撃に飛ばされる。

「ウガァー！！」

「よぅし！、決まった！」

―健一ＳＩＤＥ―

「さぁ！次だ！」

俺はある物を取り出す。

「カブトクナイガン！！！」

説明しょう！

カブトの専用武器　カブトクナイガン

状況に応じて３種のモード、ガン、アックス、クナイの３種に使い分けることが出来るのである！。

「くらえ！！！」

バシュ！！バシュ！！バシュ！！

ドカァドカァドカァ！

「ウガァー！！」

俺が撃ったカブトクナイガンの威力が強すぎた為、奴は大きく飛んでしまった。

「あっ！　しまった！」

俺は慌てて追いかけるが、奴の姿は何処にもいなかった。

「くそっ！逃がしたか！」

「何やってるのよ！？健一！！！」

綾香とコスプレ少女たちが俺の近くにやって来て言ったのだ。

「悪い！やってしまった！」

くそっ！ここで逃がすとは失態だぜ！

「あの～、すいません～？」

「うん？」

コスプレ少女の一人が俺に尋ねてきた。

「何？どうした？」

「あの～、いろいろと話さなければいけませんね？」

「あ～、確かにそうだな」

俺達は彼女の言葉に賛同することに決めた。

―ナレーション―

場所は公園から植物園っと呼ばれる施設に変わります。

「仮面ライダーですか？」

「あぁ、そうだ」

健一は彼女に仮面ライダーの事を教えていた。
さてっ！、このピンクっともとい、彼女の名は花咲　つぼみ、さっきまで変身していたのは、キュアブロッサム。
そして、もう一人変身していたブルーの女の子は、キュアマリンこと来海　えりかと言う。
「ふ～ん、何か変わってるね？」
「変わってるって、貴方ね～？」
流石にさっきの言葉に疑問をもつ綾香である。
「えりか～、そんな事を言ったら駄目だよ？」
「そうよ、この人達に失礼でしょ？」
さてっ！、えりかに注意したこの二人は、明堂院　いつきと月影ゆりと言う。
実はこの二人もプリキュアなのである。
「ところで仮面ライダーは二人だけなのですか？」
二人だけなのかとそう尋ねてくるつぼみ。
「いやぁ、あと三人俺達の仲間が居る」
「そう、あと先輩たちを含めるとかなり居るわ」

健一達の言葉に皆が驚く。

「た、たくさん！？」

「し、しかもあと三人もいるんですか！？」

「あぁ、今は三人とも武者修行に行っているんだけどな」

「そ、そうなんだ・・・（汗）」

ゆりは苦笑いしながら言う

「でも！こっちも私たちを含めて２２人もいるよ！」

「えりか・・・、負けてるから・・・（汗）」

思わずじ突っ込みを入れるいつきである

「ところあなた達は何でプリキュアになって戦ってるの？」

綾香はずっと気になっていた事を聞く。

「あ～、それは・・・」

つぼみは俺達の質問に応えてくれた。

彼女たちが今までやってきたことも全て・・・。

「砂漠の使徒にこころの大樹・・・か」

「私たちのしらない所でそんな事が・・・」

健一達はつぼみ達の言葉に耳を傾ける。

世の中いろいろあるんだねーっと健一は心の中で思った。

「あの～、私たちも質問してもいいですか？」

「何を？」

健一は首をかしげる。

「あなた達がどうして仮面ライダーになったのかを」

ゆりは重大な質問してくる。

「あ～、それはあの三人が帰ってきた時に話すよ」

「えー！何で！」

えりかは重大な話を聞きたい様にせまる。

「俺達の仲間が全員そろった方が分かりやすいだろ？」

「そうね、その法が分かりやすいわ」

綾香も健一の考えに同意する。

「・・・分かりました、ではまた次回にしましょう！」

つぼみの言葉にえりか達もうなづく。

健一もその事には覚悟していた・・・、あの日から始まった・・・・、あの日・・・［ビギンズナイト］の事を・・・。

第二話　戦いと出会い（後書き）

考えるのは大変ですなｗｗｗｗｗ

健一が先輩ライダー達知っているのかはもうすぐわかります

次回もお楽しみに！

第三話　集まる仲間（前書き）

今回は、健一達の仲間が登場します！

見ていってください

第三話　集まる仲間

―ナレーション―

一方、健一達はつぼみ達と話をしている頃。

国際空港

「いや～、着いた～」

大きい旅行バックを引いている三人の少年達の一人が思わずつぶやく。

「日本はやはりい～な～♪」

少しチャライ少年が故郷に帰ってきた事に満足している。

「少しは落ち着かないのか、お前？」

もう一人のクールな少年は、落ち着きのない少年に話かける。

「まぁ、いいじゃないですか、久しぶりの日本なのですから」

もう一人の優しい少年はクールな少年に話す。

「それはそうだが・・・」

「そうそう！細かい事は気にしない！気にしない！」

「気にするだろ・・・」

マイペースな彼に少々呆れかえるクールな少年。

「まぁまぁ、さぁ帰りましょうか？」

「あぁ、そうだな・・・おい！」

「はいよ～」

チャライ彼はポケットから機械的な携帯電話を取り出し迎えの車を呼ぶ。

「たくぅ、修行に行ってもマイペースだなあ・・・、あいつは？」

「本当ですなね」

やさしい少年はクールな少年の言葉に引かれる様に銀色のメダルを触りながら言う。

クールな少年はポケットからははみ出ている、大きいナックルを見ながら言う。

「強くなって帰ってきたぞ・・・健一！」

一方その頃、つぼみ達と別れた健一達は、赤いバイク［カブトエクステンダー］を走らせながら自宅に向かっていた。

「ねぇ健一聞いていい？」

「どうしたあ、綾香？」

「つぼみちゃん達は私たちの過去の話、ちゃんと理解してくれるかな？」

綾香はつぼみ達が健一達の過去の話をするのを理解してるか心配する。

「大丈夫だよ、そこまで子供じゃないんだから、な？」

「・・・そうよね」

心配する綾香を励ます健一である。

次の日

流星学園

「ふはぁ～」

朝には少し弱い健一はあくびをしながらバイク置き場にバイクを置き、校舎に向かう。

「朝は本当に弱いのね～」
綾香は健一の顔を見ながら言う。
幼馴染である二人はただの友達だと言うが、周りから見れば仲のいい夫婦だと思う人もいる。
「しょうがないよ、生まれつきなんだから・・・」
「は～・・・」
綾香は思わずため息をする。
「おはようさん!!!二人とも!」
「「っえ!?」」
健一と綾香は突然後ろから聞き覚えのある声が聞こえて、後ろを振り返ると。
「一真!、龍!、誠二!」
健一が思わず叫ぶ。
それは武者修行に行っていた
滝島(たきしま)　一真(かずま)
真柴(ましば)　龍(りゅう)
大塚(おおつか)　誠二(せいじ)であった。

「お帰り！何時戻ったの！」

「昨日帰って来た、こっちはかなり強くなって帰ってきたぞ」

歓迎する綾香に強くなった事の自信を持ちながら言う龍。

「そうか、こっちもかなりいい事があったぜ」

健一の言葉に反応する一真

「っえ！、マジで！何！？まさか可愛い子でも会ったのか！！？」

「そこですか～（汗）」

一真のマイペースに呆れる誠二、まぁ彼のハイテンションには誰もが呆れている。

「ふっ、そのまさかだ、なぁ綾香？」

「えぁ、そうよ」

「はい・・・？」

一真は何故か綾香が知っているのか不思議に思う。

「綾香も知っている？、日本を離れてた間に何があった？」

「あ～、それは昼休みで・・・」

龍の質問に健一は応えるのであった。

昼休み

「プリキュア？」

「あぁ、その子達に会ったんだ」

健一は龍に今までの事を話した。
しかし、誠二は何故か黙り込む。

「ん？、どうした誠二？」

「いやぁ、健一の話を聞いて何か変わったるっと思って・・・」

「いや、誠二の答えも間違ってはいない、いきなりプリキュアの話をされたら変だっと言う事が」

誠二の疑問に健一も間違ってはいないと思ってしまう。

そんな中、重い空気を一気に変えて来るバカがいた。

「なあなあ！健一！その女の子は可愛いかったか！？美人だったか！？」

「一真・・・お前・・・」

女の子にしか興味ない一真に健一達は呆れかえる。

「一真・・・、少しは空気読んでよ・・・」

綾香は一真にしっかりする様言う。

「えっ？、あぁ悪りぃ、どんな子かなっと思って」

「はぁ～、普通の中学生と高校生だったよ、でも一人はかなり小さい奴も居たな？」

健一はえりかの身長の事をつい思ってしまう。

「ぶえっくしゅん！！！」

「どうしたんです？えりか？」

「いやー、誰かがあたしの身長の事を言ってる気がして・・・？」

・・・伝わったようで・・・（汗）。

「それよりも健一？」

「っえ？あっ！そうだった！」

綾香にあの事を一真達に言っておかなきゃならない事を忘れかけいた健一。

「何だ？どうした？」

「みんな、俺の話をよく聞いてくれ・・・」

いきなり真面目になった健一に一真達に緊張が走る。

「俺はつぼみ達に俺達の過去の事を話そうと思う」

「・・・何だって？」

「本気か健一？」

「あ～、本気だ」

健一の爆弾発言に一真達は疑問を持つ。

「つぼみ達は俺達に過去の事を話してくれた、今度はこっちはが話す番だ」

健一の話に考え込む一真達。

「・・・分かった！、いいぜ」

「そっちが話したんならこっちも返さなきゃな」

「はい、僕の同じ意思です」

一真達は過去の話を話そうと、健一の意思に賛同してくれた。

「ありがとう・・・みんな・・・」

決意が決まった。

健一達の過去をつぼみ達に教える日近い。

そして、健一達の仮面ライダーの誕生の日、［ビギンズナイト］の話をするのも近いのであった。

第三話　集まる仲間（後書き）

どうですか？一真達は？

ちなみにチャライ奴は一真で、クールな人が龍で、優しいの人が誠二です。

次回もお楽しみに

第四話　仮面ライダーの秘密（前書き）

今回は健一達の仮面ライダー誕生の前編です。

どうか見てください。

第四話　仮面ライダーの秘密

―ナレーション―

学校を終えてつぼみ達に連絡をする健一。

「つぼみ、健一だけど？」

「はい、どうしましたか？」

「みんなを植物園に集めてくれないか？、大事な話をする」

「！、・・・分かりました、ではすぐに伝えます！」

つぼみは健一の話だけで理解し、すぐに電話を切った。

健一は携帯をしまい綾香達に合流する。

「どうだ？健一？」

一真はマジメな顔で声を賭る。

「あぁ、すぐに伝えますって言った」

「違う！そうじゃ無くて！」

「・・・？」

何が違うんだっと思ってしまう健一。

「そのつぼみちゃんは可愛いかってきいてるんだ！」

ズゴ～！！！

相変わらず女の子にしか興味ない一真に健一達はずっこけた。

「何であなたはそうなのよー！」

「お前はそれしか興味ないんかー！！！！」

植物園

健一達はつぼみ達が待っている植物園に到着した。

「ここか、健一？」

「あぁ、此処が植物園だ」

龍の質問に健一は答える。

因みに、植物園はつぼみのおばあちゃんが花の研究をしている場所でもある。

健一達は植物園に入る。

「こんにちは皆さん、待っていました」

つぼみ達は椅子に座って健一達を待っていた。

「へ～、その人達が健一さんが言ってた仲間？」

えりかは一真達を見ながら言う。

「あぁそうだ！、俺は滝島　一真！、よろしくな嬢ちゃん！」

「そして、俺は真柴　龍」

「僕は大塚　誠二です、よろしく」

三人はつぼみ達に自己紹介をする。

っが、またしてもその空気を読まないバカが動く・・・。

「ウッショー！、可愛い子がい（ドカァ！）ぱ・・・」

バタン。

「気にしないでくれ、こいつはただのバカだから」

龍は暴走寸前の一真を気絶させながら言う。
つぼみ達も流石に一真の暴走に呆然としている。
「さっ！、一真の事はほっといて、本題に入ろうか・・・」
健一の言葉につぼみ達に緊張が走る。
「俺達はどうして仮面ライダーの力を手にしたか、それは5年前の事だった・・・」

―5年前―

健一達がまだ中学一年の事であった。
「なぁー健一、どっか寄り道しようぜ？」
「あ～無理、これから空手の稽古があるんだ」

健一は友達の誘いを断り、空手の稽古に向かっていた。

「さ～、今日も頑張るぞ～！」

「あっ！健一～！」

「おっ！綾香じゃんか？」

稽古に向かってた所、綾香にばったりと出会った。

「今日も稽古に行くの？」

「あ～！、なんせ今日が最後なんだから！」

健一の言葉に綾香は唖然とする。

「今日が最後って？始めたのは一週間前でしょ！？」

「あ～！俺の場合、上達がとてつもなく早いからあっという間に覚えたからもういいんだ！」

「はぁ～・・・、呆れた」

健一の早い上達に綾香は呆れてしまう。

「おーい！健一！」

健一は後ろから声を掛けられ振り向く。

「おっ！一真達じゃんか？」

そこには、一真、龍、誠二の三人が近寄って来たのであった。

「これから空手の稽古か？」

「あ～そうだ」

「って、次は柔道かテコンドーか？」

「相変わらずですね～」

「ははははぁ～」

龍と誠二の言葉に思わず苦笑いする健一

「なぁ？稽古に行くんだろ？一緒言ってもいいか？見学しても」

「ん？いいけど？」

「よっしゃ！龍達も行こうぜ！」

「おう、いいぜ」

「はい」

龍と誠二は珍しく一真の誘いに賛成する

「それなら綾香も一緒に行くか？」

「え？いいの？」

「うん」

健一の誘いに綾香は考える。

「・・・行く！」

「よっしゃ！決まり！」

そして五人は稽古場に向かうのであった。

「ねぇ健一？格闘技なんかやって楽しいの？」

綾香は健一の考えてる事に質問する。

「あぁ！格闘技をやってると心が落ち着くからな？」

「まぁ、人それぞれだからな」

健一は答え、龍はつぶやく。

っが・・・彼らの運命の歯車が此処で動く・・・・！

ドサァ！

「「「「「！？」」」」」

突然後ろから大きな音が聞こえて後ろを振り向くと・・・・。

「・・・」

ドラゴンのモチーフをした怪人が立っていた。
しかし、その怪人は胸に白い玉と腹に青い玉が着いていた。

「「「「「うぁーあ！！！」」」」」

「な、何だ！！！？」

健一達は思わず腰を抜かしてしまう。
しかし、驚くのはこれだけではなかった。

「こいつらの〔スピリットエナジー〕を奪えば、これで２０個目だ・・・」

その怪人は喋るのであった。

「しゃ！、しゃべった！！！」

「け！、健一！！」

誠二はまたしても驚き、綾香は叫ぶ。

「み、みんな！逃げるぞ！！！」

健一は叫び、皆が走り出す。

「オルゲータ戦闘員！」

怪人は部下を呼び出し、健一達を捕らえた。

「や、やめろ！」

「は、はなせ！」

健一と一真が叫ぶ。

そして、怪人は綾香に近寄って行く。

「や、やめて！」

「まずは貴様からだ・・・」

怪人は手を前に出して綾香に近寄る。

「い、いやー！！！」

「や、やめろー！！！！！」

綾香の危機に叫ぶ個としか出来ない健一だった・・・。

っが、彼らを救うヒーローが現れる！。

「とぅ！」

「！？」

ドカァ！

「ぐはぁ！」

怪人は謎のヒーローの蹴りに飛ばされる。

そして、健一達を捕らえていた戦闘員は後ろにいた二人のヒーローに倒された。

「な、何者だ！」

怪人が叫ぶ。

そして、ヒーロー達は名乗る。

「俺は、仮面ライダー一号！」

「俺は、仮面ライダー二号！」

「俺は、仮面ライダーＶ３！」

「何だと！？」

怪人は驚く！

そう、彼らは人々の平和を守っている仮面ライダーだったのだ！

「君たち大丈夫か？」

一号が健一達に話しかけてきた。

「は、はい大丈・・・」

健一が大丈夫ですと言う突然！

キュイーン！！

「「「「「！？」」」」」

健一達の身体が光り、彼らを包み込む様に広がる。

「これは！？、〔スピリットエナジー〕か！？」

一号は驚く。

「ま、まさか！？」

怪人はあり得ない表情をしながら言う。

そして、光りはだんだんと消えてしまうと・・・、そこには。

仮面のヒーロー達が立っていた。

第四話　仮面ライダーの秘密（後書き）

一真の能天気は呆れますなｗｗｗｗ

次回、仮面ライダー誕生。

お楽しみに！

第五話　仮面ライダー誕生（前書き）

さぁ！始まります、仮面ライダー誕生後編！

どうか見ていってください！

第五話　仮面ライダー誕生

健一ＳＩＥＤ

「な、何だ！これ！？」

俺達は仮面ライダーに助けられた後、突然と現れた光が俺達を包み込み、光が消えたら俺達は謎の鎧を身にまとっていた。

「これは、鎧？」

「分からんない・・・一体これは・・・？」

「なんかさ・・・かっこ良くない！？」

「それ、言ってる場合ですか！？」

綾香達も俺と同じ様に驚いているが、これ・・・一体誰が？。

「まさか・・・！、仮面ライダー！？」

えっ！？。

「彼らの〔スピリットエナジー〕がもう！？」

「まさか!?、彼らの〔スピリットエナジー〕はもう決まってたのか!?」

スピリットエナジー?、何ですか?って言うか、あなた達は知っているんですか?。

「えーい!まさか〔スピリットエナジー〕が奴らの物になるとは!?」

あー!!!もう!!、スピリットエナジーって何なんだ!!?。

ピピピッ!

「うん!なんだ!・・・・・・・・!?っくそ!」

はい?何だ?

「えーい!今回は〔スピリットエナジー〕は諦めだ!命拾いしたな!」

怪人は部下を引き連れて、ずらかろうとするっておい!。

「待て!お前達はなにものだ!?」

散々好き勝手しやがって!。

「ふん!まぁいい!!教えてやろう」

怪人はこちらを向きながら言う。

「我々は悪の秘密結社オルゲータ!!!、そして私は組織幹部のド

ラグーン！、よーく覚えておけ！」

怪人はそう言って、部下達と一緒に消えて行った。

「な、何なんだよ・・・！？」

全く分からない・・・オルゲータ？ドラグーン？、一体何がどうなってるんだ！？

「どうやら奴らは君達の力を奪いに来たんだろう」

一号が俺達に近寄って来て言う。

「えっ？、俺達の力？、何ですか？それ

「まずは変身を解除するんだ、身体全体の力を抜いて？さぁ」

俺達は一号の言うとうりにやって見たら、鎧が消えた。

「あっ！消えた！？」

綾香は鎧が消えた事に驚く。

ん？、腹部に何か違和感が・・・？。

「何だ・・・？」

俺は違和感のある腹部に目を向けると・・・。

腹部に銀色のベルトが巻かれていた。

「・・・何これ？」

キィーン！

「ん？！」

俺の周りに赤いカブトムシが飛んでいた。

「何だ！？こいつ！？」

「何これ？」

「え？」

俺は綾香の方に目を向けると、綾香は白い薄い箱を握っていた、・・・まさか？。

俺は他の奴らの方を見ると、一真は機械の様な携帯を、龍は大きなナックルを、誠二は銀色のメダルを持っていた。

「？？？」

何が何だか分からなくなって来た！

「それは君たちの変身アイテムだ、つまり仮面ライダーになる為の！」

一号はこれが何なのかを教えてくれる。

「は？、変身アイテム？これが！？、って言うか仮面ライダーに！！？」

俺は赤いカブトムシに指を指しながら言う。

「あぁ、それに奴らは君たちの力、〔スピリットエナジー〕が目覚めたのなら、いつかまたやってくるに違いない！」

「はぁ！、また来るの！？」

「何だか私達、大変な事に巻き込まれたわね？」

綾香は思わずつぶやく。

「違う！、巻き込まれたのじゃない、君たちの運命だったのだ！」

「「「「「えっ！？」」」」」

一号の衝撃の言葉に俺達は驚く。

「スピリットエナジーは選ばれた物に与えられる特殊能力、スピリットエナジーは君達を選び、仮面ライダーの力を与えたのかも知れない」

「「「「「・・・」」」」」

運命って・・・。
もう決まってたのか・・・。

「私たちはこれからオルゲータの情報を探し奴らと戦う！、どうか君たちの力も貸してくれ！、そして我々と共に地球を守ろう！！！」

「「「「「！！！」」」」」

地球・・・、あいつらは、オルゲータは地球を支配するために動いてるのか？・・・、・・・・・・・・・それだったら！。

「・・・戦います！、地球を守る為なら、俺は戦います！！！」

「私も戦います！！！」

「俺も戦うぜ！！！」

「俺もだ！、奴らの好き勝手はさせない！！！」

「僕も戦います！！！」

「ありかとう！みんな！」

俺達は悪の秘密結社オルゲータから地球を守る為に戦う事を決意するだった。
そして仮面ライダーの誕生であり、地球を守る戦いが始まったのであった。

―ナレーション―

―現在―

「そして俺達は、カブト、ファム、カイザ、イクサ、バースとして奴らと戦う事を決めた・・・。」

「「「「・・・」」」」

つぼみ達は健一達の過去の話に言葉を失うのであった。
そんな中、えりかはある疑問を聞く。

「そのスピリットエナジーって何なの？」

「一号・・・本郷　猛さんから聞いたが、スピリットエナジーは人の身体の身体の中に宿ってる神秘の力、その力は途轍もなく大きく、誤れば己の身体を消し去る事が出来る危険な力なのだ」

龍の説明にえりかは顔を青ざめる。

そして、つぼみは健一達に質問をする。

「あの、健一さん達は怖く無いのですか？、オルゲータと戦うのを・・・」

つぼみは怖く無いのかと聞いてくる。

「怖がってどうするんだ？奴らは地球を支配しようと言うのに、黙って見てられないからな・・・」

健一は強い決意をつぼみ達にぶつける。
っとそこに。

「大変ですぅ！（ですっ！）（ですゅ！）」

そこに可愛いぬいぐるみが飛んできた。

「な！？」

「なんだ！？」

健一と龍は驚く。

「きぁー！何これ！可愛い！！」

綾香は流石の可愛さに思わず叫ぶのであった。

「シプレ？、どうしてのですか？」

「馬の怪物が町で大暴れしてるんですぅ！」

シプレと言うぬいぐるみの言葉に皆が驚く。

キィーン！

どうやら、カブトゼクターも感じた様である。

健一はすぐに綾香達の方に向ける。

「皆！行けるか！？」

健一の言葉に綾香達はうなづく。

「待ってください！私達も行きます！」

「一余あたし達もプリキュアなんだから！」

つぼみ達も同行したいと言ってくる。

「あぁ！もちろんだ！、俺達は初めて会った時点で仲間なんだからな！」

健一の言葉につぼみ達は一瞬驚き、顔が微笑む。

「行くぞ！！！」

「おう！！！「うん！！！」「はい！！！」」

健一の掛け声と共に皆は走り出すのであった。

第五話　仮面ライダー誕生（後書き）

いやぁー、考えるの大変だな～。

健一「やあ、作者！」
お？、健一じゃないか？
健一「なかなか頑張ってるじゃない」
まーな、っまこの調子で続きを書くよ
健一「ガンバ！」

次回　決着！

お楽しみに！

第六話　決着！（前書き）

お待たせしました！。

今回はホースオルグの最後です！

そして、カブトの第２形態がでます！

では、どうぞ

注意！：かなりの通過と修正をしました。申し訳ありません。

第六話　決着！

健一たちは、ホースオルグが暴れている場所にバイクを急いで走らせる。
多くの被害が出る前に奴を倒さなければならない、健一のカブトエクステンダーと一真のバイク、サイドバッシャーと龍のバイク、イクサリオンと誠二のバイク、ライドベンダーは大急ぎで現場に向かう。
つぼみ達は健一以外のバイクに乗っていた、つぼみとえりかはサイドバッシャーに、いつきはイクサリオンに、ゆりはライドベンダーに乗っていた。

「居たぞ！」

健一達はホースオルグが暴れてる場所に着いた。
周りを見るともうかなり破壊しまくっていた。
健一達はバイクから降りると。

「おい！こら！」

「待ちなさいよ！」

一真とえりかはホースオルグに向かって怒鳴る。
ホースオルグは健一達の方に身体を向けると。

「ようやく来たか！待ちくたびれたぞ！」

ホースオルグは喋りだしたのだった。

「嘘！喋った！？」

えりかは怪人が喋りだした事に驚く。
すると綾香は。

「健一！あれ！」

「ん！？」

健一は綾香の指先に目を向ける。

「あれは！」

健一はホースオルグの胸に驚く、胸にはあの幹部怪人と同じ白いコアがあったのだ。

「ハハハッ！、気づいたか？そうだ、これはドラグーン様直々に強化して貰ったのだ！」

なんと！、ホースオルグのコアはあの幹部怪人、ドラグーンが強化した物だったのだ。

「ドラグーンだと！？」

龍が驚くのも無理はない。

「さぁ！お喋りはここまでだ！貴様らはあの世に行ってもらうぞ！！！、オルゲータ戦闘員！！！」

「オルゲッタ！オルゲッタ！オルゲッタ！」

ホースオルグは戦闘員を呼び出したのだ、戦闘員は怪人より比べて強くはない。

「へっ！、雑魚がぞろぞろと来たやがったぜ！」

一真は戦闘員をバカにする様に言う。

「皆！気を抜かないで！」
「貴女が気を抜かないで！？」
「えっ！？」

ゆりが皆に注意したのだが、誠二に逆に注意された

「よし！皆！、いくぞ！！！」

「おう！！！（うん！！！）（はい！！！）」

健一の掛け声に皆は変身する。

まずはプリキュアから。

「シプレ！」
「コフレ！」
「ポプリ！」

ゆり以外のつぼみ達は妖精達に問いかける。

「プリキュアの種！行くですぅ！（ですっ！）（でしゅ！）」

妖精達はつぼみ達にプリキュアの種を渡して、ゆりは自分で所持していたプリキュアの種を取り出す。
プリキュアの種をつぼみ達のココロパフュームとゆりのココロポットに入れる。

「「「「プリキュア！　オープン・マイ・ハート」」」」

つぼみ達は決め言葉を言い変身する。

つぼみはピンクの服を。
えりかはブルーの服を。
いつきは金色の服を。
ゆりは銀色と藤色の服を。

「大地に咲く一輪の花、キュアブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花、キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花、キュアサンシャイン！」

「月光に冴える一輪の花、キュアムーンライト！」

「「「「ハートキャッチプリキュア！」」」」

つぼみ達はプリキュア達に変身を終えたのだ。

さぁ！次は仮面ライダーの番だ。

健一はカブトゼクターを呼び出して、綾香はファムデッキを取り出し、一真はカイザフォンを取り出した黄色いボタンを押す、『ベルトオン』っとフォントブラッドが腰から現れ巻きつき（カイザドライバー）が現れて、一真はカイザフォンに（９１３）っと数キーを打ち込むと『スタンディンバイ』っと電子音を鳴らしながら準備をする、龍はイクサナックルを取り出して、手を合わすと、『レ・ディ・ー』っとナックルから光の輪が現れて腰に巻きつき、（イクサベルト）が現れる、誠二はセルメダルを取り出して、指でメダルを弾くと、メダルがセルリアクターになり、腰にくっ付くと（バースドライバー）になる。
そして健一達は決め言葉を言う。

「「「「「変身！！！」」」」」

健一はカブトゼクターをベルトに着ける、綾香はデッキを腰に現れたベルトに着ける、一真はカイザフォンをカイザドライバーに装着する、龍はイクサナックルをイクサベルトに装着する、誠二はバースドライバーの右部のレバーを回す。

『ＨＥＮＳＨＩＮ』
『コンプリート』
『フィ・ス・ト・オ・ン』
『パカーン』

健一はカブトに変身し、綾香はファムに変身し、一真はカイザに変身し、龍はイクサに変身し、誠二はバースに変身する。

「太陽の超戦士！！！仮面ライダーカブト！！！」
「麗しの女戦士！！！仮面ライダーファム！！！」
「黄光機の戦士！！！仮面ライダーカイザ！！！」
「白騎士の戦士！！！仮面ライダーイクサ！！！」
「銀色のメダルの戦士！！！仮面ライダーバース！！！」

『我ら！！！、仮面ライダー！！！』

ドカーーーン！！！！！

健一達の後ろから大きな爆発がした。

「なんで爆発？」
っとえりかは思わずつぶやく。
っがそう思っているんのはえりかだけではなかった。

「後ろから爆発って!?、お前らはスーパー戦隊か!!?」
ホースオルグもえりかと同じ様に思っていた。
「そこは突っ込みなしで!、さぁ!皆!行くぞ!!!」
「おう!!!(うん!!!!)(はい!!!!)」
健一の掛け声で皆は走り出す。
「行け!オルゲータ戦闘員!!」
「オルゲッタ!オルゲッタ!」
ホースオルグはまず戦闘員を向かわせる、雑魚がぞろぞろとやってくる。
「行くぜ!」
カブトは向かってくる戦闘員を片っ端から倒していく、パンチ、キック、アッパーで相手を倒してく。
ボクシングと空手のコンボ攻撃に戦闘員はノックダウンしていく。
ファムは向かってくる戦闘員にある物を取り出す。
「ファムティックアロー!!!」
弓の形をしたアローを取り出して戦闘員に攻撃する。
ファムの撃った矢は戦闘員を貫通していく。

「はっ！、ぬるいぜ！！！」
カイザはテコンドー流で戦闘員を倒して数を減れしていく。
特に回転技を巧み操り蹴り飛ばす。

イクサは戦闘員にムエタイで倒していく、鋭いパンチ、キックで戦闘員はノックアウトしていく。
「以外に弱いな・・・」

「はっ！」
バースは中国拳法で戦闘員を倒して武器を取り出す。

「バースアックス！！！」

斧をベースとした武器は戦闘員を蹴散らし倒していく。

それを見ていたブロッサムは。

「皆さん凄いです！、実力がみるみるが感じます！」

ブロッサムは思わず健一達の実力に目を奪われる。
健一達は五年前から仮面ライダーをやって来ているから実力は相当の物である。

「つぼみ！、余所見している場合があったら倒してよ～！」

マリンの言葉に慌てて謝る。

「あ～！御免なさい！」

とか言いつつも、すでに戦闘員達は倒されていた。
カブトを中心に皆は集まってくる。
「さぁ！残るはお前だけだ！」
ホースオルグは倒れた戦闘員を見てもまだ余裕の顔をしている。
「ふん！まだ奥の手はある！」
ビューン！
『！？』
ホースオルグは一瞬で消えてカブト達は一瞬で倒れる。
『うわぁ！』
ホースオルグはまたカブト達の前に現れる。
「な、何なの！？」
「まさか？」
「ふん！、俺は超高速の力を手に入れたんだ！、貴様らなんか敵ではない！」
ホースオルグは超高速が出来る様である
「ふ～ん！、上等！！」

カブトは立ち上がってカブトゼクターのホーンを少し上げる。
そしたら、カブトの装甲が少し開き始めたのだ。
「な、何？「皆下がって！」えっ！は、はい！」
ファムの声に慌てて従うブロッサム達。
そしてカブトはカブトホーンを掴む、そして決め言葉は
「キャストオフ！！！」
カブトホーンを反対側に倒す。
『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』
すると装甲が弾け飛び、中に仕舞っていたカブトホーンが頭部に上がる。
『ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＩＥ』
これがカブトの第２形態ライダーフォームである。
「あれは！？」
ブロッサム達はカブトの姿に驚く。
「あれがカブトの本当の姿よ！」
ファムの言葉にブロッサム達は呆然とする。

ホースオルグはカブトの姿を見て焦る。

「えーい！！、こしゃくな！！」

ホースオルグはまた超高速に入ったが、今のカブトには通じない。

「クロックアップ！」

『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』

カブトはベルトの両側にある一つのスイッチを押す。
そしてら、周りが止まっているかの様になる。
そう、超高速状態に入ったのだ。

これがカブトのライダーフォームの力、クロックアップである

「な、何！？」

「さぁ、行くぜ！」

カブトはホースオルグに向かって行く。
ホースオルグも負けずに対抗するが、カブトの華麗なる攻撃にひるむ。

「ぐはっ！、くそぉ！！！」
それでも、立ち上がって向かってくるがカブトのカウンターで飛ばされる。

「うわぁ！、な、何故！！」

「よし！、止めだ！」
カブトはカブトゼクターにあるボタンを押す。
『1、2、3』
カブトホーンを元の位置に戻す
「ライダーキック！」
そう言って、カブトホーンを再び倒す。
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
カブトの必殺技、ライダーキックをホースオルグに向かって飛び蹴りを放つ！。
「はぁ！」
ドカァ！
「うわぁ！！！」
そして、クロックアップは解ける。
『ＣＩＯＣＫ　ＯＶＥＲ』
クロックアップが解けた同時に、ホースオルグは崩れる。
「まさか、この俺が・・・！？」
ドカーン！！！
「えっ！」

ブロッサム達はいきなりホースオルグが爆発した事に驚いたのだ、
カブトがいきなり消えてそして現れてホースオルグが倒される事に、
ブロッサム達はカブトの力に呆然とする。

「すごい！、これがカブトの実力・・・」
「レベルが違う・・・！」
ブロッサムとサンシャインは呟くのであった。

「やったね！健一！」

「お見事！」

「流石だ！」

「やりましたね！」

綾香達は健一に近寄って言うのであった。

しかし、ビルの上でその様子を見ていた奴がいた。

「ずいぶんと強くなったな・・・」

あの怪人幹部、ドラグーンであった。

「次に会うのが楽しみだ・・・！」

ドラグーンはそう言って消え去るのであった。

第六話　決着！（後書き）

書けた・・・。

戦闘シーンを書くのは大変ですｗｗｗｗｗｗ

次回はハートキャッチ組とは一時お別れです。

お楽しみに！

ライダー紹介（前書き）

次の話に入る前にこの作品のライダーを紹介しておきます。

少し加えました。

ライダー紹介

仮面ライダーカブト

健一が変身する仮面ライダー。

スペックと能力は原作と一緒だか、武器が一つ加わった。

ライダーキックは回し蹴りではなく、飛び蹴りに変更している。
マスクドフォーム時の戦闘はボクシングと空手のコンボ攻撃で行い。
ライダーフォーム時の戦闘はキックボクシングで戦う。

カブトロンブレード

この作品のオリジナル武器、形はパーフェクトゼクターに似ているが、刃は普通のソードに似ている。
ガンモードは出来ないが、カブトクナイガンと一緒に使うことで近距離や遠距離の攻撃を可能にする。
ライダーフォーム時しか使わない。

仮面ライダーファム

綾香が変身する仮面ライダー

全スペックは原作と同じである。

ファムの武器をあまり使わず、専用武器を好む。
しかし、時々使う時もある。
スピリットの進化により格闘も出来る様になり、主に空手をベースとしている。

ファムティックアロー

この作品のオリジナル武器、この武器は貫通性に優れていてどんな敵にも耐用できる。

仮面ライダーカイザ

一真が変身する仮面ライダー

原作とは異なり、カイザフォンに搭載された黄色いボタンを押すことでカイザドライバーを呼び出すことが出来る。
また音声はファイズフォンと同じ音声になっておりかなりマシになっている。

っがスペックは原作と同じである。

カイザランサー

この作品のオリジナル武器、長いリーチが特徴で中距離戦闘を可能にいている。

ミッションメモリーをセットする事でより攻撃力が上がる。

仮面ライダーイクサ

龍が変身する仮面ライダー

原作とは違って、パンチとキックのパワーは逆になっている、カイザと同様でイクサナックルを起動させるとイクサベルトを呼び出す事が出来る。
新しいフエッスル、『マキシマムフエッスル』はイクサのキックを最大２０ｔに上げる事ができる、イクサのもう一つの必殺技である。
それ以外はスペックは一緒。

イクサジャベリン

この作品のオリジナル武器、素早い攻撃を何回も可能にしている。
攻撃力は低いが連続で加えると大きなダメージになる。

仮面ライダーバース

誠二が変身する仮面ライダー

原作とはかなり違って、メダルを弾かせる事でセルリアクターを作り、バースドライバーを呼び出す事が出来る。
ドライバー自体がセルメダル自己増殖機能が着いており、毎回セルメダルを投入いなくてもいい、本来のメダル口はバースの本体武器を呼び出す『バーススイッチ』であり、押してレバーを回す事で武器が現れる。

バースアックス

この作品のオリジナル武器、みんなの中で一番の切れ味で攻撃力が強い。
しかし、攻撃力が高い分重い為、あまり鍛えていない誠二には少し扱いずらい、しかし誠二のスピリットが強くなった事で扱いが良くなった。

ライダー紹介（後書き）

こんな感じです

この作品のライダーのスーツアクターを考えるなら。

カブトは、高岩成二

ファムは、人見早苗

カイザは、伊藤慎

イクサは、岡元次郎

バースは、永徳

こんな感じですｗｗｗｗｗ

第七話　戦いの後（前書き）

できました！

どうか見てください

第七話　戦いの後

健一の家

ホースオルグを倒した後、健一達は今後の後の事を考えていた。
プリキュアと知り合い、共に戦う仲間になった彼女達は健一達の手助けにっと言ってくれたのだ。
しかし、彼女達だって長くいてくれる訳ではない。
「彼女達だって俺達と同じ学生だからなぁ～、特にゆり以外は全員は中学生だからなぁ」
健一はつぼみ達の学校についてつぶやく。
「そうね、私たちやゆり以外は全員中学生だもんね～、こっちの都合に合わせる訳には行かないからね」
「あぁ、今回は丁度俺達の話の時だったから良かったけどな」
綾香と龍は今回は良かったっと言うのであった。
でも次回は上手く行くとは限らない。

プルルルルルルル！

健一の携帯に着信が入ってきた。

「？、誰だ？」

健一は携帯を取って見ると、相手はつぼみだった。

「つぼみからだ、何だろう？」

健一は携帯に出る。

「あっ？、もしもし健一さんですか？」

「おう、どうした？」

「実はえりかが、皆さん達と祝勝会をやるみたいなんで来てくれますか？」

どうやら、えりかは健一達の祝勝会をやるみたいである。

「ふ～ん、祝杯ね～？」

「いいじゃない！祝勝会なんて嬉しいじゃない！？」

「そうだなぁ、行ってもいいんじゃないか？」

綾香と龍はえりかが考えた祝勝会に行こうと言う。

健一はえりかの祝勝会に行こうかと考える。

「う～ん、行こうかな？」

「行こうよ！健一！せっかくの祝勝会よ！」

「そうだぞ？、もったいないぜ？」

綾香と龍に説得される健一。

「・・・分かった！、行くよ」

「良かった！では植物園で待ってますからね～！」

つぼみはそう言って携帯を切る。

・・・服は何着ていこうかな？っと健一は考えたいた。

植物園

「では！あたし達と健一さん達の勝利に！」

「「「「「「「「「かんぱーい！」」」」」」」」」

えりかの挨拶で乾杯する健一達。

祝勝会に来た健一達はつぼみ達が用意した食事を食べてお祝いする。

綾香はあまり多く食べない為少ししか取っていない。

「綾香さんはあまり食べないのですか？」

「えー、健一達とは違ってあまり食べないの」

つぼみの質問に綾香は応える。

「それにしても、よく食べるわね・・・（汗）」

ゆりは健一達の方に目を向ける。

健一は身体を良く動かす為良く食べる、一真はテコンドーをやって

いる割には意外と普通に食べていたのだ、龍はムエタイで身体を極限まで鍛えている為かなり食べている。
だが、誠二は他の三人とは違ってあまり食べていない。
誠二は綾香と同じ小食なのだ。

「そう言えば、つぼみちゃん達以外のプリキュアは今何をしているの？」
綾香はつぼみ達から他のプリキュアは何をしているか聞いてみた。
「はい、他の皆さんは達は私たちと同じ学年をしています」
綾香はえっ！？っと表情をゆがませる。
「つ、つぼみちゃん達と同じ学年なの！？」
綾香はつぼみ達と同じ学年だとは知らなかった、てっきり少しつぼみ達とは年上だと思っていた。
「はい、ゆりさん以外は皆さんは同い年ですよ？」
「そ、そうなんだ・・・（汗）」
綾香はプリキュアはゆり以外は全員中学生だと今知った。
「それと、他の皆さんにも健一さん達の事を伝えましたよ？」
「あ？、そうなの？」

つぼみは他のプリキュア様に健一達の事を伝えてくれた様である。
相変わらず行動が早いこと・・・。

一方その頃。

ドラグーンは海の真上にいた。
そしてドラグーンは海に入り潜水した。
しかし、そこには敵の組織の本部、大要塞があった。

ドラグーンは要塞に入り広い場所に出る。

「ドラグーンか・・・、随分と遅かったな・・・」

ドラグーンに声を掛けたのは敵の怪人幹部、ライアスである。
ライオンをモチーフをした怪人であり組織の怪人を作る博士でもあ

る、ドラグーンはその怪人を強化することができる。

「仮面ライダーの様子を見に行っていたのだ、随分と強くなったがな」

「へぇー、じゃあー結構強いんだ？」

以外そうに言ったのは、カマキリをモチーフをした怪人幹部、マンティスである。

「そうね～、ドラグーンが言うんなら強いんでしょうね？」

マンティスの言葉に続く様に言ったのは、ウサギをモチーフをした怪人幹部、ラビットである。

怪人幹部中でもある女幹部である。

「あぁ、それとプリキュアと言う小娘どもにもな・・・」

「プリキュア？、ふん・・・頭がおかしくなったか？ドラグーン・・・」

ドラグーンの言葉にライオスは鼻で笑う。

「いや、ドラグーンの言葉は嘘ではない・・・」

「「「「「！！！」」」」」

老人の声に幹部達は慌てて後ろを向く。

「お、オラクル様！！！」

ドラグーンの声に幹部達は慌てて控える。

そう、彼こそオルゲータの大首領、オラクルである。

「仮面ライダーもそうだが、プリキュアと言う小娘達も我らオルゲータの邪魔者になる物、近い内に会うかもいれない、頼むぞ？」

「「「「はっ！」」」」

オラクルの言葉にドラグーン達は従う。

そして、新たなる戦いの幕開けでもあるのであった。

第七話　戦いの後（後書き）

さぁ！、健一達の祝杯と敵の幹部とボスが出ました！

怪人達の紹介は近い内に出します。

次回もお楽しみに！

第八話　六人の少女（前書き）

お待たせしました第八話です

健一「だんだん更新が長くなっていくね？」

意外と大変なの・・・

では、改めてどうぞ！

第八話　六人の少女

「行方不明者の捜査・・・ですか？」

「はい、そうです」

現在、健一達は学園長室に呼ばれている、それはある中学校の生徒が三日ほど行方が分からなくなっているっと家族の方から連絡があったらしく、そこの中学校の校長が健一達の学園に捜索を頼まれた様である。

「しかし、どうして私たちなのですか？」

「それは下手に騒ぎを起こす訳には行かないので、こちらの学園の生徒に捜索を頼みをお願いされたのです、それに貴方達は警察の方々から高い信頼を持たされていますからね」

そう、健一達はある警察官から高い信頼を持っており、その調査を頼まれる事もある。

「あ～、照井ね～」

一真はある警官の事を思い出すのであった。

「それで、俺達が捜査に向かう学園は？」

龍が学園長にこれから向かう学園はどこかと聞く。

「サンクルミエール学園です」

現在、健一達はサンクルミエール学園に向かっていた、向かっている途中で誠二は学園の説明をする。

「サンクルミエール学園、中学校の中でも数少ない女学校で敷地が広くバラ園やテラスがある綺麗な学校です」

「しかも、教室は俺達と同じ大学風な形になっている事だ」

誠二の説明の後に龍も説明をする。

因みに、健一達の学園の教室の講義室風である。

「ほぉー、凄いんだな?」

「でもなんでそこの学園の生徒が次々と行方不明に?」

健一が感心していると綾香は学園の生徒について話す。

「そうだぜ? なんでその学園の生徒なんだ?」

一真も綾香と同じ意見を言う。

「さぁ？、でもサンクルミエール学園の生徒だけが行方不明になるのは怪しいからな、もしかしたら、オルゲータが絡んでるとなれば大変だからな」

健一の言葉に綾香達もうなづく。

サンクルミエール学園に到着した健一達は学園長室に向かう、向かう途中に女子生徒が健一達を見てはしゃぎだす。

「何あの人！？かっこいい！？」
「あの人とても綺麗だな～」
「あの背の高い人も良くない！？」
「少しチャラい人もいいよね～！？」
「あの人はかわいくない～！？」

・・・ナレーションはとてもこう思う、健一達・・・・・・・・・もてすぎ！！！！！

「いやー！、なんかうれしいね～！」

一真は学園の女子生徒の言葉に嬉しがる。

「まっ、女学校だからな」

健一達は学園長室に到着した。

コンコン。

「どうぞ」

「失礼します」

健一は代表で挨拶をする。

「ようこそ!、我がサンクルミエール学園へ!お待ちしておりました、私がこの学園の理事長をしております」

この人が学園長である、健一はさっそく事件の事情を聞く。

「理事長、行方不明者の中に何か変な事はありませんでしたか?」

「いえ、私にも分かりません・・・、一体どこに行ったのでしょ・・

・！」

健一達は何か変わった事はないか理事長に聞いてみたが手がかりが捕まらない。

コンコン。

「？、どうぞ」

「失礼します」

扉を開けて入って来たのはこの学園の先生だった。

「どうしましたか？小々田先生？」

「はい、例の件なんですが、こちらは？」

「この人達は流星学園から来ました生徒達です」

「どうも、小々田コージと申します」

小々田先生の挨拶に健一達はお辞儀をする。

「理事長、まさか・・・行方不明者の捜査に来て頂いた人達ですか？」

「はい、そうです、それが何か？」

「でしたら！僕に任せてくれませんか！」

「？」

小々田先生の案内で健一達は会議室に来ていた。

「あのー、小々田先生？どうして会議室に？」

綾香は小々田先生に質問する。

「まず事件に入る前に聞きたいんだ、・・・・君達は仮面ライダーでしょ？」

「「「「「！？」」」」」

健一達は一瞬驚く

「どうして知っている！？あんたは？」

「それはちゃんと教えるよ、それともうすぐ彼女達が来る頃だ」

「へ？彼女達？」

一真は首をかしげる、するとドアが開く。

「こんにちはー♪」

「のぞみ！気楽すぎ！」

六人の少女達が入ってきた。

「どうゆう事です？」

「そうですよ？何なのです？」

健一と綾香が問いかける。

そしたら気楽の少女が健一を見て近ずく。

「あっ！、貴方が健一さんですね！、つぼみちゃんから聞きました！」

彼女の言葉に健一達はまたしても驚く。

そして健一は小々田先生の方を見る。

「まさか・・・あんた！妖精か！？」

「驚いた！もう分かったのか！？」

ボン！

「流石つぼみ達の言ってた通りココ！」

何と！シプレ達と同じぬいぐるみになったのだ！。

っがしかし綾香は。

「・・・・・」

「どうしたココ？」

「シプレ達の方がまだいい！」

「ココ！！！（ガーーン！！）」

綾香の言葉にココはガッカリする、お気の毒に・・・

「じゃあ君達がつぼみ達が言ってた他のプリキュアか？」

「はい！、私は夢原のぞみです！」

「私は夏木りんです」

「春日野うららです！、芸能界で活躍しています！」

「秋元こまちですよろしくお願いします」

「私は水無月かれんです」

「あたしは美々野くるみ、または」

ボン！

「ミルクですミル！」

「今回は多いな？」

あまりにもの多さに健一はつぶやく。
可愛い子に目がない一真は興奮している所を龍に押さえられている。
「では改めてこの事件の状況を説明するココ！、ある生徒が謎の黒服の男に連れて行かれる所を目撃したっと言う報告があったココ！」
ココの言葉に健一達は思い当たる
「健一！、まさか！」
「あぁ、オルゲータの仕業だな！、黒服の男だったら間違いない！」
健一はオルゲータの仕業だと断言する。
「でもなんで？、行方不明なのに連れて行かれるんだ？」
「多分誘拐を隠す為の偽造工作だろう、オルゲータのやりそうな事だ！」
一真の問いに龍が答える。
「さすが皆さん！では行くとしましょう！決定！」
ズゴーーー！！！
のぞみの勝手な考えに健一達はずっこけた。
「「「「「勝手に決めるな！！！」」」」」
のぞみは健一達の余りにのいきおいに倒れる。

「のぞみ・・・、もう少し空気読みなさい・・・（冷や汗）」

りんはのぞみの考えに呆れる。

「オルゲータは人の寄り付かない場所に隠れ家を作っているはず、無闇に突っ込む訳には行かないぞ？」

「やっぱりですか～？」

「当たり前だろ・・・」

のぞみの呆れ差に龍はつぶやく。

「こんな時はこれが役に立ちますよ！」

誠二は持ってきたトランクからある物を取り出す。

それは、デジカメの様な機械とメモリを机の上に置き、もう一つジュース缶みたいな物も置く。

「なんですかこれは？」

うららは変わったデジカメとジュース缶を見る、だが健一はデジカメを見ると。

「それ！バットショットじゃあないか！？」

「どうしてこれが？」

健一と綾香はバットショットを見て驚く。

「実はフィリップさんから借りたのです、必要になるだろうって、後これはカンドロイドっと言って僕の自信作です！」

誠二は必要な物を持ってきてたのだった。

準備が良いことで・・・。

「よし、これなら行けるな？」

「あー、じゃあ早速！」

健一はバットショットを持ってメモリをメモリ口に入れる。

『バット』

キュゥピ！キュゥピ！キュゥピ！

バットショットはデジカメからコウモリに形を変えて飛んで行く。

もう一つ、赤いジュース缶を持ってタブを開ける。

『タカカン』

キーン！

タカカンドロイドは変形してバットショットの後を追いかけて行った。

「後はバットショットとタカカンの報告待ちだな・・・」

健一の言葉に綾香達はうなずくのであった。

「ねぇねぇ！りんちゃん！今の見た！？」

「はいはい・・・見ましたよ・・・（汗）」

何とも元気な女の子です事・・・（汗）

第八話　六人の少女（後書き）

書けましたｗｗｗｗｗ

のぞみの設定はこんなんだったかな？

変な所があったら言ってください！

第九話　ライアスの企み（前書き）

出来ました！第九話！

どうか見てください！

少し文章を変更しました。

すいません。

第九話　ライアスの企み

オルゲータの隠れ家

「オルゲッタ！オルゲッタ！」

戦闘員が隠れ家に帰ってきた。

戦闘員があの黒服の男なのである。

「つけられて無いな？」

戦闘員に話かける人物、奴がこの行方不明事件の実行犯、蜘蛛怪人スパイダーオルグである。

前回のホースオルグとは違って喋れる様になっている。

「オルゲッタ！」

「そうか、つけられてはないか」

スパイダーオルグは一安心する。

「油断はするなよ！スパイダーオルグよ」

「！！！」

スパイダーオルグは慌てて後ろを見ると。

「ら、ライアス様！！？」

スパイダーオルグは慌てて控える、戦闘員達も慌てて控える。

「この学園の生徒の所には奴ら、仮面ライダーも来ている、決して気を抜くなよ？」

「はっ！」

「それに、今見つかる訳にはいかんのでな」

ライアスは後ろを向くと、そこにはここの学園の生徒五人が、気を失いロープで縛られていた。

「この娘達からスピリットエナジーを取り出せば！オラクル様もお喜びになられる！フフフフッ！ハハハハハハッ！」

ライアスは不気味な笑い声が隠れ家全体に響くのであった。

しかし、それをバットショットが見ていたのを誰も知らなかったのであった。

一方その頃、健一達はのぞみ達と一緒に隠れ家になる場所を探していた。
本当ならばバットショット達の報告を待っているはずなのに、のぞみは待つのが厭きたらしく仕方なく行動している。

「う～ん、りんちゃん！そっちは？」

「見つかんないわよ・・・、全く健一さん達の報告を待てないの？」

「だって～！、一時間経っても戻って来ないんだもん！」

そう、バットショット達の捜査から一時間が経過していたのであった。

「あのね～のぞみ」

それを見ていた健一はため息をする。

「はぁ～、仕方ないな全く・・・」

「すいません、あの子は何時もあの調子なんです」

かれんが健一に近寄って言う。

「まっ、楽しくて面白いけどな」

「確かに、一理ある」

健一の言葉に続くかの様に龍も言う。

「そうですよね、あれこそのぞみさんです！」

うららはのぞみを尊敬する様に言う。

「うららさんはのぞみさんの事を尊敬してるんですもんね」

こまちはうららに向かって言う。

「はい！、初めて私を変えてくれたのはのぞみさんですから！」

「はぁ？あの子が？」

一真は首を傾げる

「はい、私は最初は芸能界の仕事が忙しく、なかなか友達ができなくてずっと一人でした、でものぞみさんは私に初めて友達になってくれたのです！」

「ほ～、そうなのか」

健一は以外そうにのぞみを見る。

『キュゥピ！キュゥピ！』

「ん？」

話してる最中にバットショット達が帰って来た。

「さて、何を掴んだかな？」

健一はバットショットが写した画像を見る。

そこには、オルゲータが学園の生徒を担いでる画像だった！。

「よし！、情報ゲット！」

健一の言葉に皆が近寄る。

「これ！、うちの生徒だわ！」

かれんが驚く表情で言う。

この画像を見たのぞみは画像に書いてある場所に真っ先に走る。

「行かなきゃ！」

「あっ！のぞみ！」

「のぞみさん！」

りん達は走っていったのぞみの後を追う。

「おい！待て！」

「のぞみちゃん！？」

健一達はのぞみ達の後を追う。

っがしかし！

バンバンバン！

健一達の足元に火花が散る。

「「「「「！？」」」」」

健一達は周りを見渡す、そこには健一達を撃った怪人がいた。
しかもその怪人は、あの幹部怪人と同じ二つのコアがあった。

「お前は！？」

「ふん、ドラグーンが言ってたのとは少しイメージが違うな？」

「ドラグーン！？」

誠二は驚く、健一はまさか・・・っと思い当たる。

「まさかお前！、ドラグーンと同じ幹部か！？」

「そうだ！、我はライアス！、貴様らの力・・・見せてもらうぞ！！！」

ライアスは戦闘体制に入る。

「皆！行くぞ！！！」

「「「「「おう！」」」」」

健一の言葉に従い、変身アイテムを取り出す。

そして、変身準備が整う。

「「「「「「変身！！！！！」」」」」」

健一達はカブト、ファム、カイザ、イクサ、バースに変身する。

「いくぞ！！！」

健一の掛け声と同時にライアスに向かって走る。

「ふん、来い！」

ライアスはカブト達に向かって挑発をする、だがカブト達にその様な挑発は通用しない。

「はっ！」

カブトはライアスに向かってパンチを放つ、ライアスはカブトの攻撃を難なく交わす。
そしてライアスはカブトの少し貰ってしまう。

ドガッ！

「ん？」

ファムはファムティックアローを取り出す、そしてライアスに向け

て撃つ。
カブトの攻撃を貰ってライアスはすぐに交わすが一発を貰う。
「ふん！」
ライアスは少しひるむが二人の攻撃を貰っても平然と立っている。
カイザはカイザブレイガンを出してライアスに撃つが、ライアスは交わす。
ビュンビュン！
フン！
「ふん！」
「ちっ！すばしっこい奴！」
カイザはカイザブレイガンを仕舞いある物を取り出す。
「カイザランサー！！！」
ランサーを取り出したカイザはライアスに向けて振るが、ライアスは飛んで交わす。
「ちっ！」
「どけ！一真！」
イクサはライアスに向けて飛び蹴りを放つが、ライアスはそれを掴

み、それを振り回し投げる。
しかし、イクサは投げられても転びながら着地する。
「こいつ、今までの奴とは違うな！」
バースはバースバスターを取り出しライアスに向ける。
『セルバースト！』
強い光線がバースバスターから放たれたる。
っがしかい。
「ふん！」
ドガーン！！！
ライアスはそれを受けても立っていた。
「あいつ、早い上に強いです！」
「さすが幹部！、一筋縄では行かないわね！」
「どうした！、もう終わりか！？」
「まだまだ！」
ライアスは振り向くと、いつの間にかライダーフォームに変身した
カブトに向けて対用する
「はっ！」

カブトはキックボクシングで放つがライアスは防御する、パンチ、キック、後ろ回し蹴りを放つも、防御しては交わす。
でも、少しはカブトの攻撃が当たる。

バシッ！

「ほーう！」

「（今だ！）クロックアップ！」

カブトはクロックアップを発動しようとしたが、ライアスは後ろに飛んで高い場所に立つ。

「何！？」

「少しはやる様だな、またしても楽しみが増えたか？、まぁ隠れ家がばれてしまっては仕方ない」

ライアスはそう言って消えていく。

「「「「「！？」」」」」

「また会おう！、仮面ライダー！」

そう言い残し、完全に姿を消した。

健一達は呆然としながら変身を解く。

「ライアス・・・、ドラグーンも同じ強さだとすると・・・」
「幹部は相当やるな・・・」
「あぁ、確かに」
「そうですね、僕達もまだまだですね・・・」
「でもあいつらは何を企んでいるんだ？」
一真はオルゲータの狙いが何か気になる。
健一はふっ！っと思い当たる。
「まさか！、この学園の生徒のスピリットエナジーを！？」
「大変！、すぐにのぞみちゃん達を追いかけなきゃ！」
綾香の言葉に健一達はうなづき、バイクでバットショットの画像にあった場所に向かうが。
「でも一体どこに行けば？」
キーン！
「！？」
丁度タカが戻ってきて健一達にのぞみ達が向かった場所に案内する。
「よし！、行こう！」

「「「おう」」」

健一達は急いでのぞみ達の後を追うのであった。

第九話　ライアスの企み（後書き）

書けた・・・

今回は早くできました

次回もお楽しみに

第十話　赤き加速の戦士（前書き）

今回はスペシャルゲストが来ます！

さぁ！振り切るぜ！

第十話　赤き加速の戦士

健一達はライアスと戦っている頃、のぞみはバットショットの画像にあった場所に到着する。
そこは学園の外にあったのだ

「ここだ！」

のぞみは息を切らしながら言う。

「のぞみ！」

のぞみは振り向くと、りん達が近寄ってきたのだ。

「りんちゃん！」

「全く！、どうしたのよ！？」

「のぞみさんらしく無いよ！」

りんとこまちはのぞみに言う。

「ごめん、あの画像を見たらつい身体が動いてしまって・・・」

「それは分かるけど・・・」

くるみはのぞみの行動に少しは同感する。

「でも忘れないで！、私たちは仲間、プリキュアなのよ！」

かれんはのぞみに言うのであった。

「はい、すいません」

「皆さん！、来てください！」

うららの声に皆が集まる。

「どうしたの！うらら！？」

「あれを！」

うららの指す方向に目を向けるとそこには、オルゲータの隠れ家と戦闘員が立っていたのだ。

隠れ家と言うが、他の人が見たらそこは小さな廃工場である。

「こんな所にこんな物が・・・！？」

かれんは廃墟の工場に目を奪われる。

「皆！あれ！」

のぞみの指す方向を見ると、学園の生徒がロープで縛られていた。

「此処に居たんだ！」

「助けましょう！」

「うん！、皆！行くよ！」

のぞみの言葉に皆がうなづく。
そして、のぞみ達は変身アイテムを取り出す。
「プリキュア・メタモルフォーゼ！」
「スカイローズ・トランスレイト！」
のぞみ達はプリキュアに変身する

工場内はオルゲータの戦闘員と、蜘蛛怪人スパイダーオルグがいた。

「さて、この場所がばれたとライアス様から連絡があった、移動するぞ？」
スパイダーオルグの言葉に戦闘員は従い、生徒を運び出そうとする。
「はっ！」
「オガッ！」
戦闘員の一人が飛んで来た少女の飛び蹴りで倒される。
「ん！？誰だ！！」

スパイダーオルグは少女に名乗りを聞く。
ピンクの少女を中心として他の少女達が集まる。

「大いなる希望の力、キュアドリーム！！！」
「情熱の赤い炎、キュアルージュ！！！」
「弾けるレモンの香り、キュアレモネード！！！」
「安らぎの緑の大地、キュアミント！！！」
「知性の青き泉、キュアアクア！！！」
「青いバラは秘密のしるし、ミルキィローズ！！！」

「「「「「「「希望の力と未来の光　華麗に羽ばたく５つの心　Ｙｅｓ！　プリキュア５！」」」」」」」

のぞみ達は華麗に決め言葉を言うのであった。

「ふん！、やれ！オルゲータ戦闘員！」

「オルゲッタ！オルゲッタ！」

「皆！行くよ！」

「「「「Ｙｓｅ」」」」

ドリームの掛け声に皆が走る。

ドリームは向かう戦闘員に対していきなり必殺技を使う。

「夢見る乙女の底力、受けてみなさい！、プリキュア・シューティング・スター！」

「オガッ！」

ドリームの必殺技に戦闘員達は綺麗に倒される。

また、ルージュも同じ必殺技を使う。

「純情乙女の炎の力、受けてみなさい！、プリキュア・ファイヤー・ストライク！」

ルージュの必殺技が集まる戦闘員に向かって行き、戦闘員は爆発する。

レモネードも必殺技を出す。

「輝く乙女の弾ける力、受けてみなさい！、プリキュア・プリズム・チェーン！」

光のチェーンが戦闘員を囲み、そして拘束する。

そこえミントがトドメを刺す。

「大地を揺るがす乙女の怒り、受けてみなさい！、プリキュア・エメラルド・ソーサー！」

ミントから放たれた鋭い円盤状が、レモネードが拘束した戦闘員に向かって行き倒す。

最後にアクアも同じ。

「岩をも砕く乙女の激流、受けてみなさい！、プリキュア・サファイア・アロー！」

水から矢に変わったエネルギーが戦闘員に向かって放たれて、突き刺さる。

ミルキィローズは必殺技を使わずに戦闘員を倒していく。

「ふん！、あんた達なんか目でもないわよ！」

ミルキィローズは戦闘員を倒しながら言う。

っがしかし。

「スキあり！」

スキをついたスパイダーオルグは蜘蛛の糸を出して、プリキュア達を捕まえる。

「な！、何これ～！？」

「きれない～！？」

ドリーム達は必死に糸を切ろうとするが、足にも糸が絡まり倒れてしまう。

「ふん！、糸で縛れば容易い事だ！」

「卑怯よ！」

「何とでも言え、さぁ！一気にトドメだ！」

スパイダーオルグはゆっくりとドリーム達に近寄って行く。

ドリーム達も必死に糸を切ろうとするがなかなか切れない。

しかしその時に彼らが来た。

ブォーン！！！

「何！！」

いきなり現れた四台のバイクにスパイダーオルグは当たり、飛ばされる。

「大丈夫か！？皆！？」

四台のバイクから降りてきたのは健一達だった、健一はカブトクナイガンを出してクナイモードでドリーム達の糸を切った。

「健一さん・・・綾香さん！」

ドリームは健一達を見つめていた。
そして、健一は手をドリームの頭に上に置く。

「全く、無茶するなよ？」

「少しは心配したぞ？」

「今度から無理はしないで？、もう私たちも仲間なのよ？」

「健一達の言うとおりだ」

「僕もそう思うよ」

健一達の言葉にドリームは俯いてしまう。

「・・・ごめんなさい、学園の皆を早く助けたくて・・・、それであの画像を見てそれで・・・！」

ドリームの言葉を聞く健一達そして分かった、のぞみは普段は気楽

にやっているけど本当は他の人をとても心配する人だと、そんなドリームを綾香はそっと抱き寄せる。

「分かったわ、もう無理しなくてもいいから」

「綾香さん・・・」

綾香に慰めているドリームをルージュ達は優しく見つめていた。

「貴様らー！！！よくも邪魔を！！！」

どうやら飛ばされたスパイダーオルグは立ち直り向き合い、新たな戦闘員を呼んでいた所だった。

健一達はスパイダーオルグに振り向いて向き合う。

「どうやらこっちを優先する必要がありそうだな？健一！」

「あぁ！、じゃあ、行くぞ！！！」

「「「「おう！！！」」」」

健一達は変身アイテムを取り出す。

「「「「「変身！！！！！」」」」」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』
『コンプリート』
『フィ・ス・ト・オ・ン』
『パカーン』

仮面ライダーに変身した健一達は決め言葉を言う。

「太陽の超戦士！！！仮面ライダーカブト！！！」

「麗しの女戦士！！！仮面ライダーファム！！！」

「黄光機の戦士！！！仮面ライダーカイザ！！！」

「白騎士の戦士！！！仮面ライダーイクサ！！！」

「銀色のメダルの戦士！！！仮面ライダーバース！！！」

『我ら！！！、仮面ライダー！！！！！』

ドッカーーーン！！！！！

今回も同じ後ろから爆発が起きる。
だが、スパイダーは気にしなかった。

「行け！オルゲータ戦闘員！！！」

「オルゲッタ！オルゲッタ！」

スパイダーオルグの言葉に戦闘員達は健一達に向かって行く。

「今回は早く終わらすぞ！！」

「「「「「おう！！！」」」」」

そう言ってカブト達は遠距離武器を取り出す。
カブトはカブトクナイガンを
ファムはファムティックアローを
カイザはカイザブレイガンを
イクサはイクサカリバーガンモードを
バースはバースバスターを

『オールウェポン！ファイヤー！！！』

ウガァー！

ドカーーーン！！！！！

カブト達の武器に戦闘員達は全滅したかっと思った。
しかし、前方にいた戦闘員達が防御した為、半分しか倒していない。

「半分だけかよ？」

「学習したな？」

カイザとイクサに言葉がこぼれる。

「動くな！」

『！？』

なんと！スパイダーオルグは学園の生徒を人質にした。

「また卑怯な事を！！！」

「何とでも言え！！、俺は天才なんだよ！！！」

カブト達は人質をどう助けるか迷っていた、カブトのライダーフォームのクロックアップなら可能だが時間がかかる。
だがその時。

「ずいぶんと卑怯なやり方だな？」

「！？」ドカァ！！！

「うわぁ！！」

後ろから突然現れた男に蹴り飛ばされたスパイダーオルグは生徒を離した。

その生徒を男が助ける。

「だ、誰だ！！？」

「俺に質問するな！！」

スパイダーオルグは男に向かって怒鳴る。

しかし男は質問を拒否する。

ドリーム達は男に向かって言う。

「何をしているんですか！？」

「早く逃げてください！」

ドリームとレモネードが男に向かって言う。

しかし、健一達は男の方を見ると見ると驚く、赤いジャケットと赤

いズボンに黒いエンジニアブーツ、健一達の知っている人物だった！

「照井！！！」

『えっ！』

ドリーム達は驚く。

健一達の知り合いだったと言う事に。

「待たせたな？佐藤、俺も加わるぞ！」

照井はハンドルが付いたドライバーを取り出す。

そして腰に巻きつける。

「健一さん！、知り合いなんですか！？」

「あー！、彼は照井　竜！、そしてまたの名は！！！」

健一が言う前に照井は赤いメモリを出して変身する。

『アクセル！』

「変・・・身！！！」

赤いメモリをドライバー、アクセルドライバーにセットして、グリップを回す。

ブォーン！ブォーン！！！

『アクセル！』

エンジン音と同時に赤い戦士に変わる。

そう、あれこそが。

「さぁ！仮面ライダーアクセル！！！振り切るぜ！！！」

照井は仮面ライダーアクセルに変身して戦闘員に向かって行く。

「か、仮面ライダーだと！！？？」

スパイダーオルグが驚く中、アクセルは剣を取り出して、銀色のメモリを入れる。

『エンジン！』

アクセルは銀色の剣、エンジンブレードを戦闘員に向かって斬る。

「ウガァー！！」

エンジンブレードで倒された戦闘員は斬られた後、炎に包まれる。

「佐藤！、此処は俺と彼女達に任せてお前達は奴を倒せ！！、君達やれるか！？」

「えっ！？は、はい！！」

アクセルのいきなりの言葉に慌てるドリーム達。

「分かった照井！、キャストオフ！！！」

『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

『ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＩＥ』

カブトはマスクドからライダーにチェンジした
そして剣の様な物を取り出す。

「カブトロンブレード！」

カブトはカブトロンブレードを取り出してスパイダーオルグに向かって斬る。

ズバァ！

「グアッ！」

スパイダーオルグはカブトロンブレードの威力に飛ばされる。
スパイダーオルグはそのまま転びながらダウンする。

「よし！トドメだ！一真！龍！」

「「おう！！！」」

『1、2、3』
カブトはライダーキックの準備し

カイザはカイザポインターを取り出しカイザフォンのミッションメモリーをカイザポインターにセットする。

『レディー』

そしてカイザポインターを右足につける。

イクサは右腰の一番前にあるフエッスルを取り出しベルトに入れて、イクサナックルを押し込む。

『イ・ク・サ・マ・キ・シ・マ・ム・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ』

「ライダーキック！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

カイザはカイザフォンのエンターキーを押す。

『エクシードチャージ』

そして三人は自分たちの必殺技を出す。

「「「セイヤー！！！」」」

パンツ男と同じ言葉言って、スパイダーオルグに飛び蹴りの必殺技を放つ。

ボッガァーン！！！

「ウガァー！！」

カブト達の必殺技を貰ったスパイダーオルグはあちこち火花を出しながらふらふらと立ち上がる。

「これで・・・終わりか・・・！」

バタン！
ドッカァーーーーン！！！！！
スパイダーオルグはそのまま倒れ込み爆発するのであった。

アクセルの方も終盤に入る。
『エンジン！マキシマムドライブ！』
「絶望がお前たちのゴールだ！！！」
アクセルはエンジンブレードを戦闘員に斬りつける。
「ウガァー！！」
ドッカァーーーーン！！！！！
戦闘員達は爆発して消える。
ドリーム達はアクセルの実力に目を奪われる。
そしてカブト達の方へ向かう。
「健一さん！」
「綾香さーん！」
カブト達はドリーム達に方に身体を向ける。

「やったぜ！」

カブトはサムズアップをドリーム達の方に向けて言うのであった。

そして学園の生徒は無事助け出して病院に向かう、警察の話もあるがそれはよしとする。

変身を解いた健一達は生徒を見送っていた。

「良かったな？無事で」

「あぁ、それよりもありがとうな照井？、来てくれてさ？」

「礼ならいい、これが仕事だ」

照井はそう言って立ち去って行った。

「健一さん！」

「ん？」

のぞみは健一の方に近寄り頭を下げる。

「ありがとうございました！、皆さんのおかげです！」

のぞみは健一達にお礼を言う、だが健一は言う。

「いいや、これはお前達の手柄でもあるだ?、気にするな」

のぞみは驚き顔を上げて健一を見る、綾香も同じ様に言う。

「そうよ、私たちだけはじゃなくのぞみちゃん達のおかげでもあるのだから、ね?」

「は、はい!」

のぞみは健一達の言葉に喜び、りん達も同じ様に喜ぶ。

こうして、行方不明事件は無事に解決してのであった。

しかし、その様子をライアスは見ていた。

「・・・ふん、今回は負けを認めよう、だが次は必ず勝つ・・・!」

ライアスはそう言いながら消えていった。

第十話　赤き加速の戦士（後書き）

できました！

今回はプリキュアの戦闘シーンもかきました

前回は少なかったからねｗｗｗｗｗ

次回もお楽しみに！！！

少し文章を加えました。

ご了承ください。

敵幹部紹介（前書き）

遅れましたが、敵の紹介をしておきます。

敵幹部紹介

オルゲータ

世界征服を企む悪の秘密結社、その戦力はかなりの物で戦闘員は数え切れない程いる。
戦闘員の服装は全身タイツの上にヘッドギアとプロテクター、アームガードとショルダーガードとレッグガードを装備している。

オラクル

人でありながらオルゲータの大首領。
無の力を持っており世界を破壊を目論んでいる、そしてその力でドラグーン達を作りだした。
戦う力は今の仮面ライダーを圧倒する力を持っている。

ドラグーン

ドラゴンをモチーフとした幹部怪人、炎の属性を持ち逆らう者を容赦なく消す冷酷な怪人。
幹部の中で唯一飛行能力を持っていて、怪人を強化する力も持っている。
最初は健一達のスピリットエナジーを奪おうとしたが、一号たちに妨害されたあげく覚醒した健一達のスピリットエナジーの強奪に失敗する。
ヒューザーの力でパワーが増している。

ライアス

ライオンをモチーフとした幹部怪人、雷の属性で怪人を作りだす事が出来る怪人博士である。
冷静な判断で部下達に指示を与える事も出来て、幹部の中のリーダー的な存在である。
ヒューザーの力で雷撃の強さが増している。

マンティス

カマキリをモチーフとした幹部怪人、風の属性で少し子供の性格をしている。
幹部の中でも一番のスピードを得意としてそれを武器としている。
ヒューザーの力でハイスピードが増している。

ラビット

ウサギをモチーフとした幹部怪人、大地の属性を持ち幹部の唯一の女怪人である。
組織の中で唯一の卑怯者で特にプリキュアを狙おうとしている。
ヒューザーの力で防御と能力が増している。

ヒューザー

キツネをモチーフとした謎の怪人、闇の属性でドラグーンと同じ怪人を強化することが出来る他、怪人を巨大化することが出来る。
戦闘能力はそれほどないがラビットと同じ卑怯な手を使ってくる。

敵幹部紹介（後書き）

これが敵の紹介です。

まだ他にもたくさんありますが、徐々に通過していきます。

第十一話　四つのクローバーと猫型ロボット（前書き）

出来ました　第十一話

今回は新しいオリキャラとある原作キャラがレギュラー入りします。

どうか見てください！

第十一話　四つのクローバーと猫型ロボット

ある世界の東京

「う～ん！、このどら焼き美味しい～！」

青い玉の様な物体、ロボットがどら焼きを食べながら歩いていた。
っがしかし。

グォーーーン！！！

「えっ！？」

突然もの凄い音が後ろから聞こえて後ろを良く見ると、大きな黒い球体が後ろに迫っていた。

「な、何だあれは！？」

ロボットが驚く中、黒い球体はより強まり、重力場が発生しロボットを飲み込もうとしていた。

「ま！、まずい！」

ロボットは逃げようといたが、身体が浮き球体に引き込まれる。

「うぁーー！！。助けてのび太くーーーーーーん！！！」

ロボットはある少年の事を言いながら球体に引き込まれて消えて行き、球体も消えて行った。

健一達の世界

流星学園　昼休み

屋上

「ダンスコンテスト？」

「そう、友達に出て欲しいって言われたの」

綾香は健一達にダンスコンテストに出る事を言う。
何故ダンスコンテストに出るのかと言うと、綾香の友達である羽山(はやま)美保(みほ)がコンテストに出るはずのメンバーの一人が怪我で出られなくなっていまい代わりに出て欲しいっと頼まれたのであった。

「でも綾香、お前ダンス出来るのか？」

龍は綾香にダンスは出来るのかっと聞いてくる。

「うん、実は友達と一緒にやっているから大丈夫！」

綾香はVサインを出しながら言う、実際にやっているなら大丈夫だろ。

「おーい！、綾香！」

綾香は呼ばれた方に振り向く。

「あっ、美保！」

「どお？今日の放課後、ダンスの練習があるんだけど、大丈夫？」

丁度美保がダンスの練習をするっと綾香に言って誘い出す。

「うん！、大丈夫だよ！」

「やった！、あっ健一君達も来る？、見学なら見てもいいよ？」

美保は健一に見に来るっと誘ってくる。
健一はえっ？っと表情をする。

「いいのか？、邪魔しちゃいけないだろ？」

「確かに、いいのかよ？」

「いいよいいよ！、ぜひ健一君達にも見て欲しいから！」

美保は堂々と言ってくる、健一達は考え込む。

「よし！、分かった行くよ！」

「じゃあ、放課後バイク置き場で待ってるから！」

そう言って美保は屋上から去って行った。

「う～ん！美保ちゃんからお誘いが来るなんて嬉しいね～！」

「やっぱりそこですか～（汗）」

一真は相変わらず女の子に目がない様子で誠二も仕方ない様である。

放課後　バイク置き場

健一達は自分達のバイクを取りに行くと、言ってた通り美保はバイク置き場で待っていた。

「待ったか？」

「うんうん！、私も今来た所だから、行こう！」

美保はそう言って一真のバイク、サイドバッシャーのサイドカーに乗り込む。

健一達はやれやれっと思い、自分達のバイクに乗りダンスの練習場に向かう。

練習場に着くと、他の人もダンスの練習をしていた。

見学している人も居るみたいである、しかし見学している人をよく見ると。

「あれ？つぼみ？」

「あっ！健一さん！」

なんと、健一達の最初の仲間、つぼみがいたのだ。

「なんで此処に？」

「今日は私の友達に誘われたのです」

「あら？つぼみちゃん？」

綾香もつぼみを見て近寄ってくる。

「あっ！綾香さん！、どうもです！皆さんも居るのですか？」

「あー、来てるぜ？」

「綾香ー！、どうしたのー？」

どうやら美保は練習を始め様とした所、まだ来てない綾香を呼びに来たのだ。

「あれ？、その子は？」

「あー、彼女は俺達の後輩の・・・」

「花咲　つぼみです！」

つぼみはぺこりと、お辞儀をするのであった。

「へー？、私は羽山　美保よろしくね！」

美保は気楽に自己紹介をする。

「綾香！さっさと練習始めるよ！」

「えー、じゃあまたねつぼみちゃん」

そう言って二人はダンスの練習しに向かって行く。

「そういえば、健一さん達はどうして此処に？」

「見学だよ、綾香達のダンスを・・・」

つぼみは意外そうに綾香を見る。

「おーい！、つぼみちゃーん！」

声の方につぼみは振り向くと、つぼみの友達が後ろからやって来た。

「何やってるの～？」

「あっ、ラブさん！丁度良かったです！」

ラブっと言う少女をつぼみは健一達の前に出す。

「健一さん！、こちらは・・・」

「あっ！、つぼみちゃん達が言ってた人ですね！？」

少女はもの凄い勢いで健一に近寄る、健一は彼女の勢いには流石に引いてしまう。

後ろに居た他の三人の少女達は少女を抑える。

「ラブ！、少し近いよ！？」

「落ち着いて！ラブちゃん！」

「そうよ！ラブ！」

「ははははっ！、ごめんごめん！」

彼女はそう言って健一から離れる。

「えっと・・・、改めてこちらは私たちの仲間で、桃園　ラブさん、蒼乃　美希さん、山吹　祈里さん、東　せつなさんです」

「どうもで～す！」

「こんにちは」

「よろしくお願いします」

「始めまして」

四人はそう言って挨拶をする。

「じゃあきみ達がつぼみが言ってた他のプリキュア？」

「はい！、私たちがフレッシュプリキュアです！」

「ラブ？、声大きい」

「あっ、ごめん美希たん・・・」

美希に注意されるラブであった。

「っで君達は何やってるんだ？」

「健一、ジャージを着ているって事はダンスだろ？」

健一はラブ達に何をやってるのかっと聞いてると、龍が言ってくる。

「おー！よくわかりましたね、実はダンスコンテストに向けて練習していたのです」

「へー、そうなんだ」

ラブのダンスの意気込みに誠二は感心する。

「さっ！、次いくよ！」

「え！！」

健一達は綾香達のダンスの練習を見学するのをすっかり忘れていた。

「いけね！綾香達のダンスの事を忘れてた！」

「ちゃんと見てあげないと綾香は怒るからな・・・」

健一達は空いてる席に座り見学すると。

「おー！、あの人達のダンスかなり上手い！？」

「もうかなり完璧じゃない・・・」

「上手ですね」

「うん、上手い」

どうやらラブ達も綾香達のダンスを見てレベルの高さを感じたそうだ。

だがその時。

ドカーーーン！！！

『！？』

突然の爆発に健一達は立ち上がり綾香達もダンスを止めて棒立ちする。

「あれは！？」

「行くぞ！」

「「「おう！！！」」」『はい！！！』

健一達は爆発場所に向かい綾香も向かう。

「美保は此処に居て！」

「あっ！綾香！？」

綾香はそう言って健一達の後を追う。

健一達は爆発場所に到着すると、オルゲータが暴れていた。
「控えろ！、此処は我らオルゲータの支配下に置かれるのだ！！！」
「待ちやがれ！！！」
「ん！？」
健一達はオルゲータに向かって怒鳴る。
ラブ達はオルゲータの姿を見て感じる。
「あれが、オルゲータ・・・」
「ラビリンスとは桁違いのプレッシャーだわ・・・」
ラブとせつなはオルゲータのプレッシャーを感じ、冷や汗を流す。
遅れてきた綾香も合流する。
「今度はコウモリ？」
綾香はオルゲータの怪人のモチーフを見ながら言う。
今度の怪人はコウモリをモチーフをした怪人、バットオルグである。
バットオルグは健一達を見て言う。

「ほー？ドラグーン様とライアス様が言ってた連中か、まぁいいまずは貴様らから倒してやる！オルゲータ戦闘員！！」

「オルゲッタ！オルゲッタ！」

早速バットオルグは戦闘員を呼び出す。

「結局、最初は戦闘員からか・・・」

「定番だな」

「そうだな、じゃあ！行くぞ！！！」

「「「「おう！！！」」」」『はい！！！』

健一達とラブ達は変身アイテムを取り出す。

「「「「「「変身！！！」」」」」」

「プリキュア・オープンマイハート！」

「「「「「チェインジ・プリキュア・ビートアップ！」」」」」

健一達とラブ達は仮面ライダーとプリキュアに変身する。

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」

「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ、キュアベリー！」

「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュ、キュアパイン！」

「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ、キュアパッション！」

「「「「レッツ、プリキュア！」」」」

「大地に咲く一輪の花、キュアブロッサム！」

「太陽の超戦士！！！仮面ライダーカブト！！！」

「麗しの女戦士！！！仮面ライダーファム！！！」

「黄光機の戦士！！！仮面ライダーカイザ！！！」

「白騎士の戦士！！！仮面ライダーイクサ！！！」

「銀色のメダルの戦士！！！仮面ライダーバース！！！」

『我ら！！！、仮面ライダー！！！！！！！』

ドッカーーーン！！！！！！

「「「「「うわっ！」」」」」

ピーチ達は突然の爆発に驚く、まぁ驚かないのも無理はない。
ブロッサムは慣れている為、そう驚いていない。

「行け！！オルゲータ戦闘員！！！！」

「オルゲッタ！オルゲッタ！」

「さぁ！行くぜ！」

「「「「「おう！！！」」」」」『はい！！！！』

オルゲータ戦闘員に立ち向かうカブト達、しかしその場を見ていた人が居た。

「私・・・凄い物を見ちゃった・・・」

何と美保が健一達の変身する所を目撃してしまったのだ、美保は突然綾香の行動に心配して付いて行った為に健一達の変身を見てしまったのだ。

「まさか、健一君達がヒーローになっちゃうなんて・・・」

美保はだんまりすると。

「私、いい友達持ってるじゃない！！！」

「オゲ？」

美保の大声に戦闘員の一人が美保の存在に気ずいてしまう、美保も戦闘員に気ずく。

「あっ、やば」

「オルゲッタ！」

戦闘員は美保を捕まえようと追いかける、美保は追いかけてくる戦闘員から逃げる。

「うん！？」

カブトは突然戦闘員の一人が離れて行くのを見て向かう方向に目を向けると。

「げっ！美保！！？？」

『えっ！！？』

カブトの思いもよらぬ言葉に皆も目を向ける。

「なんで美保が！！？？」

ファムも美保を見て唖然とするのであった。

「ちょっと！来ないでよ！」

「オルゲッター！」

美保は戦闘員から逃げ回っていた、すると突然黒い球体が美保と戦闘員の間に現れた。

「えっ！？、何！？」

「オゲ！」

黒い球体から青い物体、ロボットをが落ちて来る。

「うわぁー！」

ドテェ！

「いってー！」

ロボットを落として黒い物体は消えて行った。

「な、何？」

美保は青いロボットをマジマジと見ていた。

「う～ん、あれ？此処はどこ？」

ロボットは周りを見て？を出していた。

「お、オルゲッタ！」

戦闘員は美保から青いロボットに目標を変え向かって行く。

「！！！、危ない！！」

「えっ？」

美保の言葉にロボットは振り向くと戦闘員が向かって来たのだ。

「うわー！、ひ、ひらりマント！！！」

突然何処から出したのか分からないが、マントを出して戦闘員を弾き飛ばした。

「ウガァー！」

美保は目を大きく開け驚く、カブト達は戦闘員を早く片付き美保の方に向かうとするが、謎のロボットを見て唖然とする。

「何あれ？」

「分からん」

カイザとイクサはロボットに目を向ける。
しかし、カブトはあのロボットに見覚えがあった。

「あいつは確か・・・？」

「あの～、貴方は？」

美保の問いにロボットは答える。

「あっ、どうも僕ドラえもん！！！」

青いロボットはあの猫型ロボット、ドラえもんだった。

第十一話　四つのクローバーと猫型ロボット（後書き）

原作キャラ・・・どうでしたか？

感想があったら遠慮なくどうぞ！

次回も楽しみにしてください！。

第十二話　事情と敵の暗躍（前書き）

出来ました！、第十二話！

どうか見てください！

第十二話　事情と敵の暗躍

ドラえもんっと言う猫型ロボットが美保の前に現れて自己紹介をした。

「ドラえもん？」

「そう」

ドラえもんは美保にそう言う。

「大丈夫！？」

美保は振り返るとファムが近寄ってくる。

「綾香！」

「えっ！！？」

何故か美保に正体を知られていた事に驚く。

「まさか、見たの・・・？」

「うん」

そんな中、カブトはあのロボットの事を思い出していた。

「思い出した！、あいつは確かドラえもんだ！」

「えっ？、ドラえもんって確か・・・、健一の部屋にあった漫画の？」

「確かにあったな、そんなの」

カブト達はドラえもんの事を言いながら言う。

「皆さん！、今はそんな事を言ってる場合じゃないと思うのですが～！！？」

ブロッサムの言葉にカブト達ははっ！っと思い出す。
彼らはバットオルグの事をすっかり忘れていた所だった。

「きーさーまーらー！！！、俺を馬鹿にしているのか！？」

バットオルグは怒りを表して怒鳴る。

「すっかり忘れていた所だったぜ！、じゃあ！行くぜ！」

カブト達はバットオルグに向かって攻撃する。

「おらぁ！」

バットオルグもカブト達に対して攻撃する、それに対しカブトは転びながら交わし、カイザとイクサがパンチで攻撃する。

「ぐはぁ！」

バットオルグは怯んだ隙にピーチ達が一気に向かって行く。

「「「「「はぁーあ！」」」」」

「くっ！」

ブン！

バットオルグは状況を不利だと判断し、翼を広げて空に向かって飛ぶ。

それでピーチ達の攻撃が逸れる。

『あっ！』

「ふっ！、今日の所は引き上げだ！！！」

バットオルグはそう言って逃げて行く。

「あっ！待て！、誠二！」

「はい！」

バースはバースバスターを取り出してバットオルグに向けて撃つ。

ビン！ビン！ビン！

バースバスターをバットオルグに向かって撃つが、バットオルグはそれを避けて逃げて行った。

「くそっ！、後ろにも目が有るのか！？」

カブト達はバットオルグを逃がした事に悔しがる。

「みんなー！」

カブト達はファムの声の方に向けて振り向くと、何と美保とドラえもんと一緒に来ていたに驚く。

「な！、おい！何で二人が此処に！？、どう言う事だ！？」

「じ、実は・・・美保に・・・」

「まぁまぁ、そう言わないの健一君？」

美保の言葉にカブト達は驚く。

「えっ！！？、何で！？」

「それはね～」

戦いの後、変身を解除して近くの公園に来て美保の話を聞いた。

「全部見たのか・・・・」

「そっ!、それにしても健一君達が仮面のヒーローになっちゃうなんて本当に凄いな～」

美保は仮面ライダーの事に驚き感心する。

「この事はあまり喋るなよ?、へたしたら大騒ぎになるからな」

「分かってるよ♪」

龍の言葉に美保は了解する。

「さて、次はお前だな、ドラえもん」

健一はドラえもんにいろいろな事情を聞く。

「一体どうやって来たのだお前?」

「うん、それが分からないんだ、僕はドラ焼きを買いに行って食べて帰っていると、突然黒い球体が現れて僕を吸い込んだんだ」

ドラえもんの話に健一達は疑問を持つ。

「黒い球体？」

「何だそれ？」

「不思議な話ですね？」

一真達はドラえもんの言葉の話に疑問が高まる。

一方プリキュア達、ラブ達はと言うと。

「う～ん、ミステリーな話ですな～？」

「黒い球体ね～？」

「信じられない話じゃあないけど・・・」

「その黒い球体が何なのかが分からないわね」

ラブ達も疑問を持つ。

「それは異空間ゲートですぅ」

健一達は顔を上げると、シプレがつぼみのすぐ近くによる。

「シプレ、知ってるのか？」

「はいですぅ、それは突然現れる謎のゲートですぅ」

「謎のゲート？」

綾香は首を傾げる。

「はいですぅ、その事についてはタルトがよく知っているですぅ」

「タルト？」

シプレの言葉に健一は首を傾げる。

「わいの事ですわ」

健一達は声のした方に向けて見ると、フェレットの様な動物と赤ん坊の様なぬいぐるみがいた。

「誰だお前？」

龍は何者かと聞く。

「申し送れました、わいはスウィーツ王国のタルトと申しますねん、んでこの子はシフォンと申しますねん」

「プリプー♪」

スウィーツ王国のタルトとシフォン、それを見た綾香と美保は。

「「可愛い～！！！」」

「はっ！、そうですやろ～わいは・・・」

「このぬいぐるみの様な赤ちゃん、超可愛い～！！！」

「あ～！、綾香！私も～！」

「キュアキュア♪」

シフォンの事で大騒ぎをする綾香と美保、シフォンはそれに応える様に喜ぶ。

だが、タルトは自分の事じゃない事に凄～くがっかりする。

「そ、それかいな～・・・（ガビーーン）」

タルトのがっかりに健一達はたり～んっと汗を流していた。

「だ、大丈夫か？」

「へ・・・平気ですわ・・・」

タルトは何とか立ち直り健一達に向けて話す。

「では改めて、カブトはんあんた〔パラレルワールド〕って聞いた事ありますか？」

「パラレルワールド・・・、聞いた事があるぞ、俺達の世界の他にも数多くの世界が存在するって言う」

「確かにあったな、その話」

健一と龍はタルトの話に真剣に聞いていたが・・・。

「なぁ健一？」

「何だ？」

一真が健一に聞いて来た。

「〔パラソルワールド〕って何だ？」

「・・・・・・は？」

「そう、そこら中に傘がいっぱい・・・って！違う！パラソルやない！パラレルやパラレル！、そこのあんた！ピーチはんと同じボケかますなー！」

タルトは一真に向かって怒鳴る。
だが、健一はタルトの話に耳を傾ける。

「えっ？ラブと同じボケ？」

健一はラブの方を見ると、ラブはまずいって顔をしながら視線を逸らす。
タルトは話を元に戻す。

「おほん！、まぁカブトはんの言った通り、数多くの世界が存在するんですわ、多分ドラえもんはんはそれに巻き込まれたのかも知れまへん、その異空間ゲートに」

そう言ってタルトはドラえもんの方に向ける。

「今の説明、よく分かりましたか？」

「う、うん大体は・・・」

ドラえもんはタルトを見ながら言う。

「でも不思議だな～、ほんやくコンニャクも食べてないのに喋ってるなんて・・・」

「ほんやくコンニャク？」

つぼみはドラえもんの言葉に首を傾げる。

「うん、僕のポケットにはいろんな道具が入っていて、ほんやくコンニャクはいろんな動物に食べさせると人と同じ様に言葉を喋れる事が出来るんだよ」

ドラえもんは自分のポケットを皆に見せる。

「うわー！凄いですー！」

つぼみはドラえもんの道具、ひみつ道具の凄さに感心する。

そこへ龍はドラえもんに聞く。

「っでドラえもんはこれからどうするんだ？、そのポケットじゃ帰れないんだろ？」

「う・・・うん、実は試して見たんだけど、帰れなかった・・・」

ドラえもんは四次元ポケットの無力差にがっかりする。
ひみつ道具は取り出せても向こうに帰る事が出来なかったのだ。
すると健一が。

「じゃあ俺の家に来いよ、部屋はかなりあるぜ？」

「えっ！？いいの！？」

ドラえもんは健一の誘いに驚く。
しかしラブは言う。

「でも健一さん、家の人に言わなくていいのですか？」

「あ・・・それは・・・」

「あのねラブちゃん・・・、健一の家族はもういないの・・・」

『えっ！！？』

「おい・・・綾香」

「この際話しておきましょ？」

一真、龍、誠二、美保以外の人達は驚きを隠せない、健一の家族が居ない事に。

「亡くなったのですか！？」

「あー、二年前にな・・・、突然の事故でな・・・突然の・・・」

健一の家族は交通事故で亡くなったのだ。
それを聞いたラブは慌てて誤る。
「ご、ごめんなさい！私とんでもないことを！」
「いや、いいんだもう慣れた、それに過去の事で騒がれても仕方ないからな」
健一はラブの方を見て言ってドラえもんの方に向けて話す。
「だから、俺の事は気にせずにな？」
「ほ、本当にいいの！？」
「あー、いいんだよ」
「あ、ありがとう・・・！」
こうしてドラえもんは健一の家に居候する事になったのだ。

一方、バットオルグは仮面ライダーから逃げて何処かに身を寄せていた。

「おのれ～仮面ライダーめ～！」

バットオルグは仮面ライダーに悔しさを感じていると。

「どうした？、バットオルグよ」

「！？」

バットオルグは慌てて後ろを見ると、ドラグーンが立っていた。

「ド！、ドラグーン様！」

バットオルグは慌てて控える。

「仮面ライダーにしてやられてか？」

「くっ！・・・はっ！、それにプリキュアのガキ共にも・・・！」

ドラグーンはバットオルグの言葉を受け感じた。

「そうか、どうやら今まで通りのやり方では駄目な様だな・・・」

ドラグーンは手をバットオルグのかざす、すると強い光がバットオルグに浴びる。

「うわー！」

「安心しろ、強化してやってるんだ」

ドラグーンの強化によりバットオルグは更に強くなっていく。

健一達はまだその頃知らなかったのであった。

第十二話　事情と敵の暗躍（後書き）

健一の家族は交通事故で亡くなったって事になっています。

家族が居ないのはさびしいからね

次回もお楽しみに！

第十三話　思いの力（前書き）

今回は健一達が初苦戦します

どうぞ！

第十三話　思いの力

健一の家に居候する事になったドラえもんは、健一にいろいろ聞いて来た。

「ねぇ健一君?、このシャトルみたいな物は?」

ドラえもんは健一に聞く、赤と銀の色を合わせ持ったシャトルみたいな物に興味があるみたいである。

「あー、それはある特撮番組のコレクションのモデルだよ」

「へー、健一君そんなのに興味があるんだ?」

「まぁ一様、趣味の一つなんだけどな、でもやっぱり好きなのは格闘技だ!」

健一の自分の趣味の個性にドラえもんはそうなんだっと思うのであった。

「ふーん、それでこれの名前は?」

ドラえもんはモデルの名前を聞く。

「スターキャリア」

翌日　流星学園
放課後

「ふーん、ドラえもんは健一の物に興味を持ってるのか」

「あー、そうだ」

健一は一真達に家であった事を話していた。

「でもドラちゃんは健一の家に馴染めるかしら?、健一の家はちょっと広いから」

綾香の言う通り、健一の家は少し広い場所である為ドラえもんは馴染めるか心配であった。
しかも大きな庭までも付いているのだ。

「その事なら心配ない、あいつは家の事については昨日で全部分かったらしい」

「へー、あの子やっぱりロボットだから物分かりがいいんだ・・・」

美保はドラえもんの賢さに感心する。

ピピピピピピッ！

突然健一の携帯が鳴る、健一は発信先を見ると相手はラブだった。

「もしもし、ラブか」

「健一さん！？すぐに来てください！！」

「どうした？慌てて？」

「昨日の怪人が現れたんです！」

「！？」

ラブの言葉に健一は表情を歪ませる。

「分かった！すぐに行く！」

健一は携帯を切って綾香達を見る。

「どうしたの？」

「昨日の怪人が現れた！」

「えっ！！？」

綾香達は健一の言葉に驚く。

「行くぜ！」

「「「「「おう！！！」」」」」

健一達はラブ達の応援に向かうのであった。

だが、美保が。

「私も行く！」

健一達は美保の突然の言葉に驚く。

「まて！美保！、お前も来たら・・・」

「私だって役に立ちたい！」

美保の言葉に健一は黙る。

「・・・分かった！ついて来い」

「うん！」

「おい！健一！？」

「美保は意地でもついて来るわよ・・・一真」

美保も健一達と一緒に同行するのであった。

「「「「はぁーあ！！！」」」」

ピーチ達は昨日の怪人、バットオルグに向かって飛び蹴りを放つ。

「ふん！」

しかし、バットオルグはピーチ達の攻撃を避けず身体で受け止め弾き返す。

「きぁー！！」

ピーチ達はバットオルグに攻撃を弾き返されて倒れてしまう。

「な、何！あいつ！？」

「昨日よりすっと強くなってる！？」

「どうして！？」

ピーチ達はバットオルグの異常な強さに驚く。

「はっ！、どうだ！我の力は！、もう貴様らなんか敵ではない！」

バットオルグの言葉にピーチ達は悔しがる。
しかし、それでもピーチは諦めていなかった。

「みんな！、こうなったらクローバーボックスで！！！」

「「「えぇ！！！」」」

ピーチ達は強化変身をしようとしたが。

「させるか！！！」

バシューン！！！
ドッカァーン！！！

「「「「うわー！！！」」」」

バットオルグの強力な光線にピーチ達は飛ばされて大ダメージを負う。

「くっ・・・！」

「はっーはっはっはっはっ！！！、さぁーて！トドメと行くか！」

バットオルグは勝利を核心しながらゆっくりとピーチ達に向かって行く。

「あ・・・あいつ！？、強すぎる！？」

「ここまでなの！？」

ベリーとパインはバットオルグに圧倒的な強さに思わず言葉がこぼれる。

ピーチは悔しがって言う。

「くっ！・・・悔しい・・・！」

ブォーーーン！！！

「ん？！」

バットオルグはいきなり現れたバイクに振り向く、バイクはバットオルグに向かって行くがバットオルグは後ろに飛んで交わす。
そしてバイクは止まる。

「大丈夫か！？皆！！！」

健一達は急いでピーチ達の所に向かう。

「け、健一さん！」

「すいません・・・！」

「こんなぶざまな格好を見せてしまって・・・！」

「ごめんなさい！」

ピーチ達は健一達に謝る、しかし健一達は首を横に振る。

「いいや、お前達はよくやったよ」

「そうよ、頑張ったじゃない！」

「後は俺達に任せろ！」

「美保さん！、ラブちゃん達をお願い！」

「うん！、分かった！」

美保はピーチ達を連れて離れる、健一達はバットオルグの方に向ける。

「ふっ！ようやく来たか？、仮面ライダー！！！」

「よくも可愛い女の子をいじめてくれたな！」

「女の子はとても敏感なのよ！」

「さぁ！お仕置きタイムだ！」

健一達の言葉にバットオルグは笑う。

「はぁーはっはっはっ！！！、今度やられるのはお前達だ！！！はぁ！！！」

バショーン！！！
ドッカァーーーン！！！

「「「「「うわー！」」」」」

バットオルグの光線に健一達も倒れてしまう。
それを見ていた美保とピーチ達。

「健一君！綾香！」

「一真さん！龍さん！誠二さん！」

彼女達はただ声を上げる事しか出来なかった。

健一達は何とか立ち直る。

「あいつ・・・この前よりパワーアップしてやがる！」

「あの馬野郎と同じって事か！」

「その通り！」

『！！？』

突然の声に健一達は驚く、するとバットオルグの後ろからドラグーンが現れる。

「「「「「ドラグーン！！！」」」」」

「久しぶりだな？仮面ライダーの諸君！、どうだね！強化されたバットオルグの力は！？、今の君達では勝てないぞ！！！」

「それはやって見なければわからないだろ！！！、行くぞ！！！」

「「「「「おう！！！」」」」」

健一達は変身アイテムを取り出す。

「「「「「「変身！！！」」」」」」

「キャストオフ！！！」

『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

『ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＩＥ』

健一達は仮面ライダーに変身する、カブトはすぐにマスクドからライダーにチェンジする。

「行くぞ！！！」

「「「「おう！！！」」」」

カブト達はバットオルグに向かって行く。

「行け、バットオルグよ」

「はっ！」

バットオルグはカブト達に対して迎え撃つ。

「はっ！」

カブトはバットオルグにパンチを放つが、バットオルグは受け止めてはらった後にカブトにパンチを放つ。

ドカァ！

「うわぁ！」

バットオルグに飛ばされるカブト、その隙にファムはファムティックアローを取り出して放つ。

「ふん！」

しかし、バットオルグはアローも受け止め弾き返す。
バシュン！！！
「きゃあ！」
「綾香！」
カイザはカイザランサーを出して、バットオルグに向かって行く。
「おらぁ！」
カイザはカイザランサーを振るが、軽く交わされてカウンターをもらってしまう。
「ぐはぁ！」
「ちっ！」
イクサはバットオルグに向かって行き、かかと落としを放つ。
「ぬるい！」
バットオルグはイクサのかかと落としを受け止め投げ飛ばし、壁に激突する。
「おわっ！」
「皆！」
バースはバースアックスを取り出し、バットオルグに振る。

しかし。

「そんな重い斧！当たるか！」

バットオルグはそれを軽く避けて蹴りを放つ。

ドカァ！

「うわぁ！」

全員の攻撃をも交わされては弾き返し、カブト達の攻撃が全く通用しない。

カブト達はフラつきながら集まる。

バットオルグはさっきより強力な光線をカブト達に放つ。

「はぁー！！！」

ビューン！！！

ドッカァーーーン！！！

「「「「「「「うわぁー！！！」」」」」」」

カブト達はさっきの攻撃で大ダメージを食らう。

それを見ていたドラグーンは笑う。

「はっはっはっはっ！、どうだ！バットオルグの力は！、もう仮面ライダーなど敵ではない！

「みんなー！」

ドラグーンは声のした方に向けるとピーチ達がカブト達の方に向か

って行く。

「大丈夫ですか！？」

「だ、大丈夫だ・・・！」

カブト達はボロボロになっても立ち上がる。

バットオルグは言う。

「まだ分からんのか？、もう貴様らなんか敵ではないのだ！」

「俺達はな！どんな時でも諦めないのがポリシーなんだよ！！！！」

カブトはドラグーン達に向かって言う。

「例え勝てない確率が１％の確率でも！、俺達は絶対に諦めない！！！、それが仮面ライダーだ！！！！」

カブトの強い言葉にピーチ達は呆然する、そして自分たちの諦めない事を思い出した。

「そうよ！！、私たちは倒れても立ち上がって立ち向かう！！！、私たちプリキュアもね！！！！」

ピーチはそう言ってカブトを見る、カブトもピーチを見てうなづく。

そしてカブト達はバットオルグを見る。

「だから！！！、俺達は決して諦めない！！！！！！」

カブトはそう言うと、カブト達から光が現れる。

ピーチ達はカブト達を見て驚く。
「何！？」
ドラグーン達も驚く。
「な！、何だ！！？」
「これは・・・！、まさか！？」
しばらくすると、光は消えてカブト達のダメージは回復していた。
それを見ていたドラグーンは。
「バカな！、スピリットエナジーが奴らのダメージを！？、バットオルグよ！！」
「はっ！」
バットオルグは回復したカブトに向かって走る。
「おらぁー！！！」
バットオルグはカブトに思いっきりパンチを放つがカブトはこれを軽く手で止める。
パシッ！
「ば！馬鹿な！」
バットオルグが驚く中でカブトはバットオルグにパンチ、キックを放つ。
ドカァ！！
「ぐはっ！」

バットオルグはカブトの攻撃に飛ばされダウンする、今のカブト達はスピリットエナジーで強くなっているからである。

「今だ！！！一真！龍！」

「「おう！！！」」

カブト、カイザ、イクサは必殺技を放つ準備をする。

『1・2・3』

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

『レディー』『エクシードチャージ』

『イ・ク・サ・マ・キ・シ・マ・ム・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ』

「くっ！」

ドラグーンは危険と判断し去る。

「えっ！！？、ド！ドラグーン様！？」

「「「はぁー！！！」」」

カブト達は飛んで必殺技を出す。

「「「セイヤー！！！」」」

ドッカァーーーン！！！！！！
「うわぁー！！！！」
バットオルグはカブト達の必殺技をもらい火花が飛び散る。
「こ、こんな事が・・・！！！！」
バタン！
ドコーーーーン！！！！！！！！！！
バットオルグはそのまま爆発した。
それを見ていたピーチ達は呆然し、そして勝利に喜ぶ。
「「「「「や、・・・やったー！！！！」」」」」
「健一さーん！！！！綾香さーん！！！！」
カブト達は走って近寄ってくるピーチ達の方に向けてサムズアップする、ファムはピースでアップするのであった。

戦い後、皆は健一の家に向かう。
「あっ、お帰り！」
ドラえもんは嬉しい顔で言って来たのだ。

「どうした？ドラえもん？嬉しがって？」

「ふふふっ！皆こっちこっち！」

ドラえもんは奥に向かって行く、健一達は？を出してドラえもんの後について行く。

ドラえもんの後について行くと、そこには大きな扉があった。

「あれ？、俺の家にこんなのあったっけ？」

「いいからいいから！」

ドラえもんは扉にあるボタンを押す。
すると、その扉はエレベータになっており健一達はエレベータに乗ると、エレベータは下に降りて行き地下２５階に到着すると、そこにはまるで基地みたいな所でありとても広い場所であった。

「何だ・・・ここ？」

「すごいでしょ！ここは君達、仮面ライダーの基地［オメガステーション］っであーる！」

何とドラえもんは健一の家に基地を作ってしまったのだ。
ラブ達はドラえもんが作った基地に驚く。

「凄い！ドラちゃんこんなの作っちゃうなんて！」

「いやー、それほどでも！」

健一は流石に基地の事については呆然するのであった。
凄い物を作ってしまった物だと。

オルゲータ大要塞

「そうか・・・奴らのスピリットエナジーが・・・」

「はい！」

ドラグーンはオラクルに健一達のスピリットエナジーの事を報告していた。

「私の強化だけでは勝てません！、もっとスピリット・・・力があれば！」

「その事なら心配ない、ヒューザー」

「はっ！」

ドラグーンは顔を上げると謎の怪人が立っていた。

「オラクル様、こいつは？」

「申し遅れました、わたくし魔導師ヒューザーでございます」

ヒューザーはドラグーンに挨拶をする。

「ヒューザーはお前と同じ怪人を強化する事ができる、しかもそれだけはなく怪人を巨大化する事も出来るのだ！」

「何と！！？」

ドラグーンが驚くのも無理はない、いくらドラグーンでも怪人を巨大化する事は出来ないからである。

「わたくしが仲間に入ればより強力な戦力になりますよ？ふっふっふ！はぁーはっはっはっは！！」

オルゲータに新たな怪人が加わってしまった事に健一達はまだ知る予知もなかったのだった。

第十三話　思いの力（後書き）

ドラえもんは健一の家の地下に基地を作ってしまったｗｗｗｗｗ

オルゲータも新たな怪人が加わり、より激戦になるでしょう！

次回もお楽しみに！

スピリットエナジー説明（前書き）

かなり遅れましたがここでスピリットエナジーの説明をします。

スピリットエナジー説明

スピリットエナジー

それは人の身体に最初から宿している未知の力、その力は強力で下手をすれば自分の身体を崩壊することができる危険な力でもある、しかしそれを上手く操れば超人並の能力を手に入る事が出来る。

健一達の場合、仮面ライダーの力が覚醒して通常の人よりかなりの身体能力を手にしている為戦闘能力が高い。
１３話でエナジーが強くなった為、能力が増えている。

健一の場合
格闘や筋力の数値が高くなっている為、部活での加減が難しくなっている。
１３話で武器の扱いが上昇している。

綾香の場合
弓の腕が上昇している。
１３話で苦手な格闘も習得する。

一真の場合
素早さが飛躍的に上昇している。
１３話パンチ力が増えている。

龍の場合

筋肉が一回り大きくなっている他パワーが増えている。
１３話ドライビングテクニックが上昇している。

誠二の場合
開発技術が格段に上昇している。
１３話で筋力が上昇している。

スピリットエナジー説明（後書き）

こんな感じです。

あとそれからこの物語に戦隊ロボを入れようと思います！
ロボの登場はスイート組の後から入れようと思います！
因みに自分は地球戦隊ファイブマンの第２ロボのスターファイブが
一番好きです！

次回もどうかお楽しみに！！！

第十四話　黒と白　金と銀（前書き）

実は今自分、アンチャーテッド　砂漠に眠るアトランティスのゲームにはまっています！やはりあれは面白いね！
健一「それにしちゃ早くできるな原稿？」
仕事行きながらも原稿を考えてるからね・・・

今回はＭａｘ　ＨｅａｒｔとＳｐｌａｓｈ☆Ｓｔａｒを一緒に入れました。

ご覧ください！

第十四話　黒と白　金と銀

オルゲータ大要塞

ヒューザーを囲んだドラグーン達、ヒューザーはドラグーン達を強くするっと言ってきたのだ。

「本当に強くする事が出来るのか？ヒューザー・・・」

ライアスはヒューザーに問いただすのであった。

「わたくしの言葉に嘘はございません、では始めましょう。」

ヒューザーが手を上げると、ドラグーン達の足下に魔法塵が現れる。

「闇の魔力よ！、ドラグーン様達に強大な力を！はぁー！！！」

ヒューザーの掛け声と同時に魔法塵の光が強まりドラグーン達を包み込んだ。

「「「「うおー！！！」」」」

光が消えていくと、姿形は変わらないが腹部のコアが金色になっていた。

「おー！、分かるぞ！力があふれて来るのが！！！」

ドラグーン達は自分の力を満喫している様だ。

「流石だヒューザー」

ヒューザーは後ろを振り向く、そこにはオラクルが立っていた。

「どうも、オラクル様」

「まさかドラグーン達を強くするとはな、よくやった・・・」

オラクルはそう言って去って行った。

「あいがたいお言葉！」

「さ～て・・・じゃあ今回は僕が行こうかな？」

「マンティス？」

突然のマンティスにドラグーン達は唖然する。

「そろそろ、僕も仮面ライダーと戦いたいな～」

「それなら私も行くわ」

何とラビットも同行するっと言って来たのだ。

「私もプリキュアと戦って見たいからね？」

「じゃあ二人で行こうか？ラビット」

「えー、じゃあねぇ」

マンティスとラビットはそう言いながら消えて行った。

「・・・念の為に怪人を送るか？」

「いや、今回は良いだろう・・・」

オメガステーション

ドラえもんがオメガステーションを完成して以来、健一達はここをベースとして活動を行っていた、つぼみ達もラブ達から聞いて此処に遊びに来る事が多くなったのだ。

ある日の事、一真が。

「な～健一～、たこ焼きを食べに行こうぜ～？」

いきなり一真がたこ焼きを食べたいと言ってきた。

「どうした？いきなり？」

「たこ焼きが食べたいって如何してなの？」

健一達は一真に訳を聞く、すると一真はカバンからあるチラシを健一達に見せる。

「これだ！」

「何々？、アカネ特性たこ焼き限定発売？」

「そうだ!、このたこ焼きを食べたいんだ俺!」

「へーそうか・・・」

健一は一真のたこ焼きにへーっと言う。
健一達がたこ焼きの話をしていた時、エレベータからのぞみが来たのだ。

「こんにちは〜!」

「あら?いらっしょいのぞみちゃん、今日は一人なの?

「はい、りんちゃんは部活の助っ人でうららは芸能界の仕事、こまちさんは図書委員の仕事でかれんさんはヴァイオリンのお稽古なんです、所で何の話をしていたのですか?」

「一真がたこ焼きを食べたいって言ってるのよ、はいこれ・・・」

のぞみは綾香からチラシをもらってそれを見ると、のぞみは思い出す。

「あれ?、ここ・・・私知ってますよ?」

のぞみの言葉に健一達はえっ!?と表情を出す。

「な、何ですか!その顔!?」

「いや・・・、お前の口から意外な言葉が出てきた物だから・・・」

「同感・・・」

「確かに・・・」
「ちょっとね・・・」
「りんちゃんから達から聞いたけど、少しドジっぽい所があるって言ってたから・・・」
「も～！りんちゃん～！」
のぞみはりんに余計な事を言わないでっと心の中から言っていた。
「あっ！そうだ！」
一真はある事をひらめき、のぞみの近くに寄る。
「なぁ！知ってるなら案内してくれ？、俺このたこ焼きを食べたいんだ！」
「え、えーいいですよ？」
「よっしゃ！」
「ねぇ・・・健一、いいのかな・・・？」
綾香は健一に聞く。
「まぁ、一真が食べたいって言うからいいんじゃないか？」
「う～ん、まっいっか・・・」
健一の話に仕方なく了解する綾香であった。

健一達はのぞみも案内で特性たこ焼きを販売しているたこ焼き屋に向かっていた。
ドラえもんも誘ったが、『僕はドラ焼きの方がいい』っと言って断ったらしい。

「ドラちゃんも来たらいいのに・・・」

「まああいつはドラ焼きがいいって言ってたからいいんじゃないか」

「まっそうだな」

健一達が話して行くと、のぞみは健一達の方へ振り向く。

「着きましたよ、ここです」

健一達はのぞみの案内にあったたこ焼き屋に着いた。

「へーここかぁ・・・」

「店と言うより、移動販売車だな?」

龍の言うとおり、アカネって言う人の店は移動販売車なのだ。

「まあ細かい事は気にしないで!、たこ焼きを食べようか!」

「あー、そうだな」

一真を先頭に健一達は着いて行った、そして一真は特性たこ焼きを注文する。

「すいませーん！、特性たこ焼きを六人前をお願いしまーす！」

一真が店の人に注文するが・・・。

「すいますん特性たこ焼きはもう売り切れてしまって・・・」

「んなっ！（ガーーーーン！）」

一真は特性たこ焼きが売り切れた事にガッカリする。

健一は店の人に聞く。

「どうして売り切れたのですか？」

「それがあの子達がたくさん食べてしまって・・・」

定員の目の方向に健一達は向けると、そこには特性たこ焼きを大量に買って食べてる女の子達がいた。

するとのぞみは。

「あっ！皆」

のぞみの声に反応する様に振り向く。

「あっ！のぞみ！」

「のぞみちゃん」

二人はのぞみがいた事に驚く、それともう二人ものぞみの存在にびっくりする。

「あら、のぞみさん」

「のぞみさんじゃない、どうしたの？」

「いやーそれが・・・」

「あ～あ～、特性たこ焼き・・・」

一真は未だにたこ焼きの事でガッカリしている。
それを無視する健一達。

「あっ！そうだ！丁度良かった！」

のぞみは健一達を後ろから押して前に出す。

「皆この人達がつぼみちゃんが言ってたかめ（パコ！）んだ！」

のぞみが言う前に健一がのぞみの頭を叩く。

「いったーい！、何するんですか！？」

「あまりその事を言うな、特に店の人にはな？」

「あっ・・・」

のぞみは健一の言葉に思い出すのであった。

のぞみは健一にしぶしぶ謝る。

「す、すいません・・・」

「まあまあ健一、その辺でいいじゃない？」

綾香の言葉に健一は仕方なく了解する。

綾香の言葉でたこ焼きを食べてた四人は驚く。

「健一！？、じゃあ貴方がつぼみが言ってた人ですか！」

健一達は彼女の言葉に驚く表情を出すのであった。

しばらくすると店の定員、アカネさんっと言う人は買い出しに行った為問題はなくなった。

そしてのぞみは言う。

「じゃあ健一さん、改めて紹介します、こちらが美墨　なぎささん雪城　ほのかで、そしてそちらが日向　咲　美翔　舞です」

「こんにちはー、皆さんの事はつぼみ達から全部きいてます」

「私たちの先輩ってことですね」

健一達はなぎさ達に先輩って呼ばれた事が嬉しいようである。

「まぁそんな感じだな」

「所で、つぼみちゃんから聞いたけど、後の一人は？
「あっ！そうだ！ひかりちゃんは？」
「あー、ひかりならもう・・・」
「お待たせしましたー」
健一達は後ろを振り返ると、一人の女の子が駆け寄って来る。
なぎさは駆け寄って来た女の子を健一達の前に出す。
「健一さん、この子が九条　ひかりです」
「こんにちは、九条　ひかりです」
ひかりは健一達にお辞儀をする、そして一真の方に目が入る。
「あの～、あの人は一体どうしたのですか？」
「特性たこ焼きを食べ損ねただってさ」
誠二はひかりの質問に応える。
龍はなぎさ達の征服に違いがある事に気がつく。
「君達制服がバラバラだけど、違う学校なのか？」
「はい、私とほのかとひかりが一緒の学校で、咲と舞が違う学校なのです」
「へーそうなのか・・・」

なぎさ達の説明に健一は納得する。
だがその時。

「やぁ、仮面ライダーにプリキュア・・・」

『『！？』』

健一達は突然の一言に驚き振り返ると、二つのコアを持った怪人が立っていた。

「お！お前達は！！？」

「どうも～、私たちはオルゲータの幹部のラビットと・・・」

「僕はマンティス、宜しく」

マンティス達の出現に健一達は慌てて構える。

「くっ！いきなり幹部の登場かよ！？健一！」

「あー！行くぞ！！！」

「「「「「おう！！！」」」」」「「「「「「はい！！！」」」」」」

健一達は仮面ライダーに、なぎさ達はプリキュアに変身しようとする。

「おっと、プリキュアの貴女達は私と一緒に来てね？」

パキンッ！

ラビットが指を鳴らすと、地面が突然割れて、なぎさ達は割れたすき間に落ちていった。

『うわぁーーー！！！』

「皆！！！」

「それじゃマンティス後は宜しく～？」

「うん、楽しんでいきなよ」

ラビットはマンティスにそう言ってすき間に入って行った。

「あっ！待て！」

健一達は追いかけ様としたが、いっきにすき間は閉じて行った。

「えっ！！？閉じるの早！？」

「これで楽しめるね～？」

健一達はマンティスの方を見る。

「くそっ！まずはこっちが先か！？」

「仕方ない！行くぞ！！！」

「「「「「おう！！！」」」」」

「「「「「変身！！！」」」」」

健一達は仮面ライダーに変身してマンティスに立ち向かって行った。

だがこれはマンティスとラビットの力試しだと言う事だと健一達は後から知るのだった。

第十四話　黒と白　金と銀（後書き）

今回は戦闘はなしですが次回はかなり入れます。

健一「なあ作者」
なんだ健一？
健一「スピリットの説明の後書きに書いてあった事だけど、本当に戦隊ロボを入れるの？」
もちろん！、その為に書いたんだ！」
健一「・・・凄いことになりそうだ・・・」

第十五話　幹部の力（前書き）

出来ました！

どうか見てください！

第十五話　幹部の力

「行くぜ！！！」

マンティスに立ち向かうカブト達、カブト達はマンティスに攻撃を仕掛けるに対し、マンティスは余裕の表情でカブト達を近寄らせる。

「はっ！」

カブトはマンティスにパンチやキックで攻撃する。
だが。

「ほい♪」

マンティスはカブトの攻撃を軽く交わしカウンターを放つ。

ドカァ！
「うわぁ！」

「やっ！」

ファムマンティスに空手攻撃で対抗する。

ヒョイ
「あれ？君確か格闘は苦手なはずじゃあ？」

「スピリットが強くなったから格闘も出来る様になったのよ！」

ファムはそう言って攻撃するが、マンティスはまたしても軽く交わし、前蹴りでカウンターを放つ。

ドカァ！

「くっ！」

ファムが倒れてる隙にカイザとイクサはマンティスに飛び蹴りを食らわす。

「「うおりゃあーー！！！」」

「ふん♪」

マンティスは鼻で笑うと一瞬で消えてカイザとイクサの身体から火花がでる。

バチンバチンバチンバチン！！！

「「うわぁーーー！！！」」

カイザとイクサはそのまま落ちて倒れ込み、マンティスは姿を現す。

バースはドライバーにあるバーススイッチを押してレバーを回す。

『パカーン』

『ドリルアーム』

「はっ！」

バースはマンティスにドリルアームで対抗しようとする。

「遅いよ？」

マンティスはドリルアームを難なく交わし、バースにパンチのカウンターを与える。

バキン！

「うあっ！」

カブト達はマンティスに軽々しく攻撃を交わされて、逆にカウンターのダメージを貰う。

「つ！・・・強えぜ！幹部は！？」

「やっぱりドラグーン達と同じ強さね！」

「へっ！だがこれはこれで面白いぜ！」

「あー！、負けられないな！」

「すうですね！」

カブト達は少しふらつきながら立ち上がる。

「そうなか？、さっきのは力の半分以下のはずなんだけどな・・・？」

マンティスの言葉にカブト達は驚く。

「何だと！今ので半分以下！？」

「嘘でしょ！？」

「本当だよ？、ほらコレが証拠」

マンティスはカブト達に腹部のコアを見せる、そしてカブト達はコアの色が金色になっていた事に気づく。

「コアの色が！？」

「金色になってる！？」

カブトとファムはマンティスのコアの変化に驚くのであった、健一達はドラグーン達のコアを見ている為よく知っているのである。

「でしょ？、だから僕は前の力の半分以下しか出してないんだ」

「つまり俺達はお前の力試しのテスト代わりって事か！！！」

カイザはマンティスに向かって怒鳴る。

「事実を言うならそうだね？、だからもう少し付き合ってよ？」

マンティスはそう言ってカブト達に向かって走り出す。

「くそっ！健一！」

「あー！、皆気を抜くな！！！キャストオフ！！！」

『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』

『ＣＨＡＮＧＥ　ＢＥＥＴＩＥ』
カブトはマスクドからライダーにフォームチェンジする。
「ふっ！」
ズバァン！！
マンティスの鋭い鎌の攻撃にカブト達は紙一重で交わす、だが交わした場所を見て見ると地面がごっそり削られていた。
「げっ！なんて切れ味！？」
「斬られたらひとたまりも無いぞ！？」
カイザとイクサはマンティスの攻撃にぞっとする。
「ははははっ♪」
ビュン！
マンティスは自分の特技、超高速に入る。
だがカブトもそれに対する。
「何の！、クロックアップ！」
『ＣＬＯＣＫ　ＵＰ』
カブトもマンティスと同じ超高速に入り向かっていく。
「へー？、君も出来るんだ？」

「当然！」

カブトはカブトロンブレードを取り出しマンティスに向かって走る。

「はっ！」

カブトはカブトロンブレードを振るが、マンティスはヒョイヒョイと交わしていく。

「ははははっ♪」

「ちっ！本当にすばしっこい奴！」

カブトはマンティスの素早い動きに手間取る、そしてマンティスはカブトの隙をつき回し蹴りを放つ。

ドカァ！

「ぐはっ！」

「ははははっ♪、流石にもう飽きちゃったかな？」

「それはこっちも同じだよ！」

『1・2・3』

カブトはマンティスにライダーキックで攻撃する。

「ライダーキック！！！」

『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』

「はあぁーーー！！！」

カブトはライダーキックでマンティスに放つが。

「ふーん？それが君のライダーキックね～？」

ビュン！

「何！？」

ズバズバズバズバ！！！

カブトはいきなり消えたマンティスに驚くと突然身体中に火花が出る。

「ぐはぁぁぁぁ！！！」

『ＣＬＯＣＫ　ＯＶＥＲ』

ドサァ！

「健一！！！」

クロックアップが解けたカブトに慌てて向かうファム達。

「大丈夫！？」

「あ・・・あー！何とかな！、ブレードとクナイガンで防御したから少しは助かった・・・！」

何とか立ち上がるカブト、彼はブレードとクナイガンで一時的に防

御をしていたのだ、そしてマンティスが姿を現す。
「どお？驚いた？、僕は君よりも早い超高速に入れるんだよ、でも凄いね～？あの超高速に対して防御するなんて？」
マンティスは自慢の様にカブト達に言う。
「また楽しみが増えたかな？、さ～て充分に楽しんだし帰ろうかな？じゃあ」
ヒュン
マンティスはカブト達にそう言って消えて行った。
カブト達は悔しさが出てくる。
「くっ！やっぱり幹部は強いな・・・！」
「この前のバットオルグに比べてかなりな・・・！」
カブトとイクサはマンティスの強さに悔しがる。
「それよりも早くなぎさちゃん達を！？」
「あー！そうだな何時までもへこんではいられないな！、誠二！ドリルアームで穴を掘ってくれ！」
「分かった！」
バースは急いでドリルアームを出す。
『パカーン！』

『ドリルアーム』

バースは急いで地面に穴を開ける、そるとそこへ。

「おーい！皆ー！」

カブト達は後ろを見ると、ドラえもんがタケコプターで降りて来たのだ。

「ドラえもん？！どうして此処に！？」

「基地のセンサーが戦闘を感知したから来たんだ！、それよりもその小さなドリルじゃ時間がかかる！」

「じゃあどうするんだ！？」

カブトはドラえもんに問いただす。

「任せて！、［ビックライト！！！］」

ドラえもんは四次元ポケットからビックライトを取り出すのであった。

「誠二君！ドリルをこっちに向けて！」

「えっ！？どうするの！？」

バースは言われた通りにドリルをドラえもんの方に向ける。

「えい！」

ピカーン！

ビックライトの光を浴びたドリルアームの先端が大きくなっていった。

「でかくなった！？」

「でもこれなら行けるぞ！」

「あー！、誠二！」

「はい！」

バースはでかくなったドリルアームで穴を掘り始めた。

一方時間を遡る中、健一達がマンティスと戦っている時、なぎさ達はラビットの能力で広い地下に落とされた。

「「「「「「「うわぁぁぁぁぁ！」」」」」」」

ドテェ！

丁度柔らかい地面に着いた為大きな怪我はしていないが、それでも多少は痛い。

「「「「「「いったーい！」」」」」」

「ふふふっ♪、そんな声を出すなんてやっぱり子供ね？」

なぎさ達は顔を上げると、ラビットが立っていたのだ。

「貴女！」

「私たちをどうする気！？」

なぎさと咲はラビットに向かって怒鳴る。

「や～ね～？、せっかく場所を変えたのにそんな言い方は無いでしょ？、まぁ仮面ライダーが居たらなかなか相手に出来ないからね？」

「その為に私たちを此処へ！？」

「そっ♪、じゃあはじめましょ？」

ラビットはムチ見たいな武器を取り出す。

「皆！変身だメポ！」

「急ぐラピ！」

なぎさ達のポケットから妖精達、メップルとフラッピ達が出てきて言う。

「うん！、皆！行くよ！！！」

「「「「「「うん！！！」」」」」」

なぎさの言葉に皆は変身アイテムを取り出す。

取り出すっと言っても妖精達が携帯と箱見たいな物に変わる。

なぎさとのほのかは手を繋ぎ、咲と舞も同じ手を繋ぐ。
ひかりは箱見たいな物を持つ。
のぞみはキュアモを取り出す。

「「デュアル・オーロラ・ウェイヴ！」」

「ルミナス・シャイニング・ストリーム！」

「「デュアル・スピリチュアル・パワー！」」

「プリキュア・メンタモルフォーゼ！」

なぎさ達はプリキュア達に変身する。

「光の使者、キュアブラック！」
「光の使者、キュアホワイト！」

「闇の力のしもべ達よ！」
「とっととお家に帰りなさい！」

「輝く魂、シャイニールミナス！光の心と光の意志、全てをひとつにするために！」

「輝く金の花、キュアブルーム！」
「煌めく銀の翼、キュアイーグレット！」

「聖なる泉を汚す者よ！」
「アコギな真似はお止めなさい！」

「大いなる希望の力、キュアドリーム！」

ブラック達は華麗に決め言葉が決まる、しかしナレーションはブラックにこう思う、戦う前に誰も帰らないから・・・。

「えっ！！？そうなの！？」

「？、どうしたの？」

「えっ・・・いや・・・なんでも・・・（冷や汗）」

あまりナレーションに聞かない事だブラック・・・（汗）、するとそこへラビットが動く。

「何をしてるの！こっちから行くわよ！！」

ビュン！

ラビットはムチでブラック達に攻撃を仕掛ける、ブラック達はラビットのムチ攻撃を散らばって交わし広がる。

丁度近くにいたブラックとブルームはラビットに向かって飛んで攻撃する、ブラックはパンチ、ブルームはキックで放つ。

「「はあぁぁぁぁぁ！！！」」

「ふふふ♪」

ラビットはムチで向かってくるブラックとブルームを捕まえる。

「ぐっ！」

「捕まえた♪、はっ！」

ラビットはブラック達を振り回して投げ飛ばす。
「「うわぁぁぁぁぁ！！！」」
ブラック達はラビットに投げ飛ばされ、壁に激突する。
ドカァァァァ！！！
「ブラック！！！」
「ブルーム！！！」
ホワイトとイーグレットは思いっきり叫ぶ、そしてラビットに向かって走る。
「「はあぁぁぁぁぁ！」」
二人はラビットに向かってダブルキックで攻撃する。
っがしかしラビットはムチを放し二人のキックを受け止める。
「えっ！！？」
「そんな簡単にいかないわよ？、はっ！」
ラビットは掴んだまま二人を振り回して地面に叩きつける。
「「キャア！！」」
「「はあぁぁぁぁ！」」
ラビットは振り向くと、ドリームとルミナスがすぐ近くに居てラビットにパンチを叩き込む。

ドカァ！
「これでどお！」
「それが？」
「「！！！」」
ドリームとルミナスは驚く、二人の攻撃が全く効いていなかったのだ。
そしてラビットは二人を掴んでブラック達の方に放り投げる。
「ふん！」
「「きゃあああぁぁ！」」
「ドリーム！ルミナス！」
ブラック達はドリーム達の方に駆け寄る。
「だ・・・大丈夫！」
「それよりもあの人強いです！」
「うん！、今まで戦ってきた奴よりも！」
ブラック達はラビットの強さに翻弄されるが、彼女達はあきらめてなかった。
「皆！必殺技で行くよ！」
『うん！！！』

「漲る勇気！」「溢れる希望！」「光輝く絆とともに！」
「精霊の光よ！命の輝きよ！」「希望へ導け！二つの心！」
「夢見る乙女の底力、受けてみなさい！」

「「エキストリーム！」」「ルミナリオ！」
「「プリキュア・スパイラル・ハート・スプラッシュ！」」
「プリキュア・シューティング・スター！」

ドッカァァァァァン！！！

ブラック達の必殺技がラビットに直撃して爆発する。

「やった！？」

ブラック達は煙が消えるのを待つ、しかしブラック達は驚く、何と全員の必殺技を貫っても立っていたのだ。

「ふっ！、なかなかいい技を持ってるじゃない！？、じゃあ私はそろそろコレで決めようかしら？」

ラビットは地面に手を置くと、地面から大きな岩の鉄球が出てきて

ブラック達の方に向かって行く。

「岩の鉄球？」

「その岩の鉄球は私の能力で一番硬くしているうえに、触れたら消えてしまうからただではすまないわよ？」

ラビットの言葉にブラック達は目が飛び出るぐらい驚く。

「嘘でしょ！？」

「「「「「「うわぁぁぁぁ！！！」」」」」」

ブラック達は岩の鉄球から慌てて逃げるのであった。

「うわぁぁぁ！！！、こ！来ないでぇぇぇぇ！！！」

「冗談はやめてぇぇぇ！！！」

ラビットは慌てて逃げるブラック達を見て思わず笑ってします。

「ほーほっほっほっほ♪、（本当は触れても何ともないからね♪）もっと！もっと！踊りなさい！」

パラパラ・・・。

「あら？」

突然上から砂が落ちてきて見て見ると・・・。

ドカァァァァ！！！

いきなり天井が壊れて穴が現れると、カブト達が穴から出てくる。

スタッ！
「皆！大丈夫か！？」
ブラック達は逃げながらもカブト達の方を見る。
「うわぁぁぁ！！！、み！皆さーん！助けてー！」
「あれに触れたら消えてしまうんですー！！！」
ブラック達はカブト達に助けを求めるのであった。
「マジか？」
「あの岩の鉄球、そんな力が？」
「ラビットの能力か？」
「とにかく助けましょ！」
ファムの言葉にカブト達はうなづき、飛んでブラック達と鉄球の間に着地する。
そして遠距離武器を出す。
『オールウェポン！！！ファイヤー！！！』
ビューン！！！
ドカァァァァン！！！！！！
カブト達の武器によって鉄球は粉々に砕ける。

「あーもー！！！、もう少しで面白くなるのにー！！！、もう帰る！」

ヒュン

楽しみを破壊されたラビットは腹をたちながら消えていった。

「あっ！あいつ逃げた！？」

「意外と短気なんだな？」

カイザとイクサはラビットの逃げ足に言葉が出る、ブラック達は鉄球が破壊された事により座り込んでいた。

地上に出た健一達は変身を解いて幹部達の事を話していた。

「マンティスとラビット・・・、強化された奴らはかなり強かった・・・」

「多分ドラグーン達も同じ様に強化されてるかも知れない・・・」

「こっちの必殺技を貰っても平然としてましたし・・・」

なぎさ達は自分達の必殺技が効かなかった事に弱気になっていた。

しかし健一達はめげなかった。

「だが奴らが強くなったって事は背後に誰かが居るって事だ！」

「あー！、例え誰が居ようが俺達は絶対に負けられない！！！」

ヒューザーの力で新たなを手に入れたオルゲータの幹部達、健一達は戦いはより激戦を増すのであった！。

第十五話　幹部の力（後書き）

ここであるお願いがあります！、実は活動報告にも書いてあります様に健一達のチーム名を募集しています！。
もしありましたら遠慮なく書いてください！

期限は２３日までです。

次回もどうかお楽しみに！

番外編　その後の健一達（前書き）

今回はかなり短いです

それでも読んでください！

番外編　その後の健一達

オメガステーション

マンティス達の戦いでいろいろとあった健一達。
そこへ健一はある事に気がついた。

「あっそう言えば」

「どうしたの健一？」

「一真、特性たこ焼きを食べ損ねたな？」

健一の言葉に一真は今思い出したのだ。

「あっ！！！、そう言えばすっかり忘れてた～・・・・」

ガクッ

一真は思いっきり落ち込んで言ってしまったのだった。
するとそこへ。

ブォーン

「こんにちはー」

舞がオメガステーションに来たのだった。

「いらっしゃい舞ちゃん、どうしたの？」

「はい・・・実は一真さん、特性たこ焼きを食べ損ねたでしょ？、私まだ食べていませんから持って来たのです」

「えっ？マジで！！！」

一真は思いっきりたこ焼きの方に行き食べ始めたのだ。

健一は舞に礼を言う。

「いやー悪いな舞、わざわざ持ってきてくれてさ？」

「いえ、私はただたこ焼きを持って来ただけですから」

「いやー！舞ちゃん！ありがとう！！！」

一真は飛んで舞に抱きつこうとした。

っが。

ドカン！！！

バタン・・・

「何をしてるのかな～（怒）」

綾香は１０ｔハンマーを持って一真を思いっきり叩きつけたのだ。

「ご・・・ごめんなさい・・・」

ガク

一真はそのまま気絶したのだった、健一達はその光景を黙って呆然としていた。

「やれやれだな・・・」

「全くだな・・・」

健一と龍は一真の姿に呆れていた、すると誠二が。

「ねぇ健一、ドラえもんの姿が見えないんだけど？」

誠二の言葉に健一も気づく。

「そう言えば何処に行ったあいつ・・・？」

ドラえもんはステーションの一つ下の階、大型格納庫に居たのだ。

「ふぅ～、もう少しで完成する・・・」

ドラえもんは上を見上げると、青をベースとした船があったのであった。

それが今後の戦いに必要な戦力になる物だと。

番外編　その後の健一達（後書き）

番外編どうでしたか！？

どうか感想をお待ちしています！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0116x/

仮面ライダー＆プリキュア　戦う戦士たち

2011年11月17日20時02分発行